

「この福音は、あなたがたが神の恵みを聞き、それをほんとうに理解したとき以来、あなたがたの間でも見られるとおりの勢いをもって、世界中で、実を結び広がり続けています。福音はそのようにしてあなたがたに届いたのです。」(コロサイ 1:6)

【巻頭言】

「JCE7に期待するもの」

JCE7(第7回日本伝道会議)実行委員長 小平 牧生

「パウロがこの幻を見たとき、私たちはただちにマケドニアに渡ることにした。彼らに福音を宣べ伝えるために、神が私たちを召しておられるのだと確信したからである。」(使徒 16:10)

2023年に開催が予定されている JCE7@東海の準備が始まりました。諸教会、諸教団、そして多くの宣教団体の皆様と、福音宣教のために力を合わせたいと願っています。これまでの六回の会議を簡単に振り返ってみましょう。

第一回の日本伝道会議は、「日本をキリストへ」とのテーマのもとに、1974年に京都において行われました。主講師はジョン・ストット師でした。1968年には「日本福音同盟」が誕生し、翌69年には「新改訳聖書」が発行されています。その後、第二回の会議は1982年に同じ京都で「終末と宣教」、第三回は1991年に那須塩原で「日本からアジア、そして世界へ」、第四回は2000年に沖縄で「21世紀の日本を担う教会の伝道—和解の福音—」、第五回は2009年に札幌において「危機の時代の宣教協力—もっと広く、もっと深く—」、そして、前回第六回は2016年に神戸で「再生への Re-VISION~福音・世界・可能性~」とのテーマで開催されました。ちなみに、第三回までの会議は日本福音同盟(JEA)の主催で行われましたが、第四回からは JEA の枠を超えた実行委員会によって開催されるようになりました。

振り返りますと、その初期においては、私たちのアイデンティティである聖書信仰を確認し、特に第四回以降は、福音のための宣教協力を進めることに取り組んで来ました。前回の会議では、私たちが福音のすばらしさを再確認することからはじめ、時代と世界の文脈にある私たちの姿と、そして与えられた可能性を見直し、具体的な分野における宣教協力をプロジェクトとして進めるとともに、地域の交わりや教団教派をネットワークとして結ぶ宣教協力の態勢をつくることを目指しました。そのような働きを通して深められた関係があり、広められた協力があり、強められたつながりがあります。そのようにして与えられて来たものを豊かに活かし、新たな変化を生み出し、それらを一つに結び合わせる努力をしながら、将来につなげていきたいと願っています。

JCE6のプログラム局の責任が与えられて間もなく、私はフィリピン福音同盟(PCEC)の議長であったノエル・パントーハという方にお会いする機会がありました。フィリピンはご存知のようにカソリックの国です。1975年にはプロテスタント教会の数は約5000でした。しかし PCEC が中心になって、フィリピンの教会全体で「2000年までにすべてのバランガイ(村や島の単位)に主の教会を生み出そう」との目標をかかげました。2000年を迎えた時、すべてのバランガイに教会を生み出すことはできなかったのですが、51000の教会となり、ほとんどのバランガイに教会が存在するようになりました。

このエピソードは、今も私のチャレンジとなっています。教会がいくつになるかとか、何年までにということは良いとして、しかし、心を合わせて取り組む目標があることをうらやましく思いました。「日本の教会は何をめざしていますか」と問われた時に、それに答えることができないことは残念です。それぞれが歩んできた伝統を受け継ぎ、与えられた賜物や特徴を生かして、主体的な伝道を進めている私たちが、「日本をキリストへ」と導くために、文字通り冒頭の御言葉のように「私たち」となりたいのです。(基督兄弟団西宮教会牧師)

【JMRレポート】

今回のJMRレポートは、仏教寺院とキリスト教会に対するコロナ禍の影響とその対応についての調査として、仏教寺院に対しては、大正大学地域構想研究所・BSR推進センターが公表した調査結果を、またキリスト教会に対する調査としては、アジアアクセス主催「新型コロナウイルス対策セミナー」の参加者に対するアンケートのデータを、アジアアクセスのご好意により提供していただき、それをもとに作成した結果を掲載いたします。また、『中外日報』のオンライン情報からも、記事を転載させていただきます。

「寺院における新型コロナウイルスによる影響とその対応に関する調査」 単純集計の結果報告

2020年6月19日
大正大学地域構想研究所・BSR推進センター

【調査概要】

- ・方法: インターネットによるWEBアンケート
- ・調査期間: 2020年5月7日(木)～5月24日(日) ・有効回答数: 517名

【回答者属性】

・所属宗派

浄土真宗（各派）	191
浄土宗（各派）	149
曹洞宗	38
真言系（各派）	38
日蓮宗	30
臨済宗（各派）	22
黄檗宗	17
天台宗	15
時宗	9
その他	8
融通念仏宗	2
合計	517

・寺院の所在地

北海道	17	石川県	10	岡山県	0
青森県	8	福井県	4	広島県	11
岩手県	3	山梨県	5	山口県	7
宮城県	5	長野県	4	徳島県	0
秋田県	10	岐阜県	4	香川県	6
山形県	10	静岡県	29	愛媛県	5
福島県	11	愛知県	27	高知県	2
茨城県	12	三重県	13	福岡県	17
栃木県	5	滋賀県	21	佐賀県	5
群馬県	7	京都府	18	長崎県	5
埼玉県	17	大阪府	35	熊本県	4
千葉県	14	兵庫県	20	大分県	5
東京都	63	奈良県	7	宮崎県	2
神奈川県	34	和歌山県	2	鹿児島県	2
新潟県	5	鳥取県	1	沖縄県	0
富山県	20	島根県	4	その他	1
				合計	517

・立場

住職	350
副住職	131
寺庭(坊守)	11
その他	25
合計	517

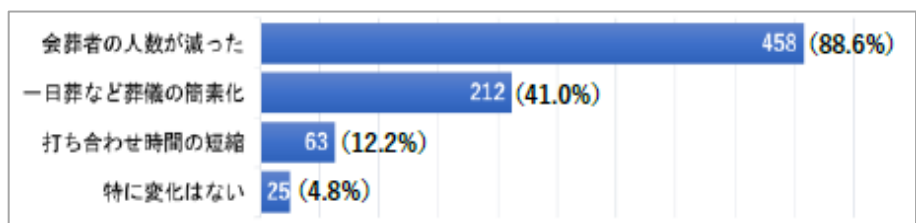
・寺院の所在地

北海道	17	石川県	10	岡山県	0
青森県	8	福井県	4	広島県	11
岩手県	3	山梨県	5	山口県	7
宮城県	5	長野県	4	徳島県	0
秋田県	10	岐阜県	4	香川県	6
山形県	10	静岡県	29	愛媛県	5
福島県	11	愛知県	27	高知県	2
茨城県	12	三重県	13	福岡県	17
栃木県	5	滋賀県	21	佐賀県	5
群馬県	7	京都府	18	長崎県	5
埼玉県	17	大阪府	35	熊本県	4
千葉県	14	兵庫県	20	大分県	5
東京都	63	奈良県	7	宮崎県	2
神奈川県	34	和歌山県	2	鹿児島県	2
新潟県	5	鳥取県	1	沖縄県	0
富山県	20	島根県	4	その他	1
				合計	517

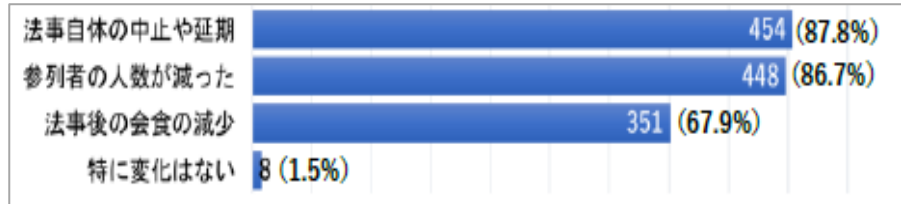
・性別

男性	479
女性	36
その他	2
合計	517

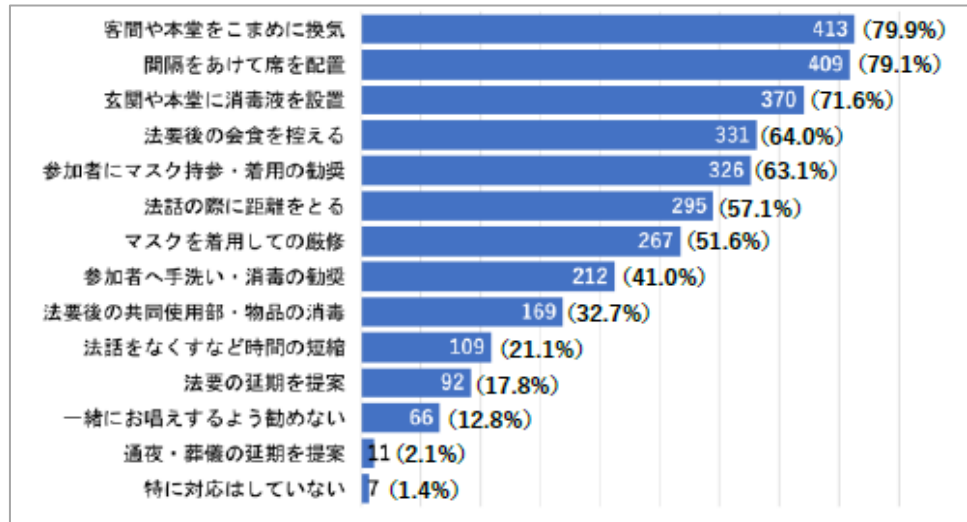
(1) 葬儀についてどのような変化がありますか。
(複数回答可)



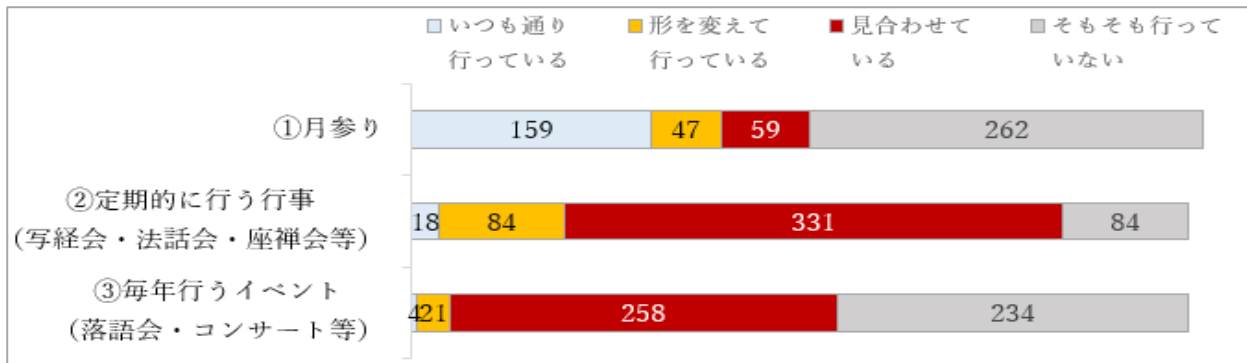
(2) 法事についてどのような変化がありますか。
(複数回答可)



(3) 葬儀や法事の際に特別に取っている対応はありますか。
(複数回答可)



(4) 現在、以下の檀務・法務・定例行事をどのように行っていますか。



(5) (4)のいずれかの項目で「形を変えて行っている」を選択した方にお尋ねします。どのように行っているか具体的に教えてください。

■月参り

- ◇訪問せずに、寺にて行う(13件)
- ◇マスク着用・除菌等の徹底(13件)
- ◇希望をきく(9件)
- ◇茶菓接待の辞退(6件)
- ◇時間短縮(4件)

■定期的に行う行事(一部、毎年行うイベントとの重複有)

- ◇無参列での実施(29件)
- ◇規模・時間の縮小、方法の変更(23件)
- ◇オンラインでの実施(20件)(・坐禅会はZoomを利用・法話をYouTubeで動画配信、ハガキ通信にQRコードを添える等)
- ◇マスク着用、間隔をあけるなどの感染対策(6件)

■毎年行うイベント(一部、定期的に行う行事との重複有)

- ◇無参列での実施(7件)
- ◇オンラインでの実施(6件)
- ◇規模・時間の縮小(5件)

(6) これまでにお尋ねした以外で影響のあった行事はありますか。あれば、どのような影響か具体的に教えてください。(269名から回答)

■法要・儀式の延期・中止(93件)

- ◇花まつりの中止(13件)
- ◇法話会の延期・中止(10件)
- ◇彼岸法要の中止(9件)
- ◇晋山式の延期(8件)
- ◇開山忌・御忌・遠忌等の延期・中止(8件)
- ◇施餓鬼法要の延期・中

止(7件) ◇永代経の延期・中止(6件) ◇落慶式の延期(3件) ◇大般若法会の中止(2件)
◇五重相伝会の延期(2件) ◇仏前結婚式の延期・中止(2件)

■団体参拝の延期・中止(75件) ■無参拝や縮小など形を変えて実施(60件)

■寺院の役員会等の延期・中止(23件) ※その他、書面による役員会実施という回答が2件

■一般向け行事(子ども会等)の延期・中止(15件) ■研修会(僧侶向け・檀信徒向け)の延期・中止(13件) ■他寺院、教団等の行事の延期・中止(11件) ■参拝者の減少・変化(9件)

■教室・習い事の中止(8件) ■拝観・御朱印等の縮小・中止(7件) ■収入の減少(7件)

(7) 檀家・門徒・信徒の方々からの新型コロナウイルスに関する相談を受けていますか。

あれば、具体的に教えてください。(247名から回答)

■法要に関する相談(193件)

◇法要を延期・中止したい ◇法要をしてもよいのか?自粛すべきか? ◇法要の規模・場所等の変更について ◇少人数で行いたい ◇集まる・集めるのが不安 ◇遠方のためにできない・行けない ◇無参列・住職に依頼 ◇仏教としてどうか ◇参詣したい ◇自宅に来てほしくない ◇新型コロナウイルスで亡くなった場合の相談

■生活の不安やストレス(22件)

(8) 新型コロナウイルスの影響を受けて、今後の法務にどのような変化があるか、気になっていることや心配なことを教えてください。(373名から回答)

■葬儀・法要の簡略化(118件) ■法要が途絶える、法要文化の衰退(58件) ■寺院の行事縮小・衰退(51件) ■世代間不継承、寺離れ、意識の低下(47件) ■月参りの減少(33件)

■寺院経営の先行き(29件) ■関係性や儀礼の変化・見直しの機会(27件) ■今後の対応を思案中(25件) ■オンライン化への是非(13件) ■ウイルス対策(8件)

(9) 新型コロナウイルスの影響を受けて、新たにはじめたことがあれば教えてください。(244名から回答)

■オンライン対応(検討中含む)(112件)

例) 寺の Facebook 開設と寺報よりも細かな情報の発信。

・葬儀や法事は、希望があれば、Zoom を使って、遠隔配信しています。

・Facebook や Twitter など法話の発信を始めた。

・SNS を利用してのお勤め作法動画配信、お寺の様子配信など。高齢の方多いこともあるためか反応は薄い。

・遠方のお檀家さん向けに、法事の様子を動画撮影してのメール送付をはじめた。

・僧侶同士のオンライン会議やオンライン坐禅会。

・遠方からの親族へスマートフォンでお墓参りを共有。

・インターネット回線を持たない上に寺に参れない高齢門徒のためタブレットを複数台購入。コロナ期間中はそれを使って法座や会合を開きます。

・法事の動画配信(Zoom、LINE、YouTube からの選択)の案内を出した。

・寺の公式 YouTube チャンネルを開設。

・Zoom での朝の会、子供向けの朝の会、住職の部屋(Zoom 個人 ID を開放してよろず相談を受ける時間)を行っています。

・法要の動画を撮影したが、公開の方法を考えている。あくまでも寺での法要、行事への参加を勧奨する手段として位置づけ、限定公開やライブ配信のみなど工夫をする必要がある。

・オンライン上のお寺、オンライン寺院を始めました。具体的には、法話や仏教講座の動画や文章などを配信しています。

■無参拝法要・代理参拝(31件) ■寺報・郵送物(26件) ■ウイルス対策(16件)

■写経(12件) ■御札・御守り配布、ウイルス退散祈願(9件) (以下省略)

(10) 現在まだはじめていないが、今後取りうる対応があれば教えてください。(250名から回答)

■法要・法話×オンライン(43件) ■盂蘭盆会・棚経×場所変更(32件) ■盂蘭盆会・棚経×その他・実施の有無など検討中(29件) ■オンライン、インターネットの活用(既出法要を除く)(34件)

(以下省略)

(11) あなたが現在までに取り組んでいることについてお尋ねします。新型コロナウイルスに関して、檀家・門徒・信徒を問わず、人々にすでに伝えていることはありますか。あれば、どのような方法でどのようなことを伝えているか教えてください。(316名から回答)

■方法・媒体の分類(複数記載可、記載のあるもののみ)

◇紙媒体:121(寺報、郵便物、掲示板他) ◇インターネット:75(HP、ブログ、SNS、メール他)

◇口頭:55(法事・法話、月参り他)

■寺院の対応(方針や事務連絡等) *一部抜粋

例)・寺報で、法事や葬儀を執り行う際の基本的な方針を示した。また、様々な困りごとの電話相談を受けることを周知した。

- ・寺報にて COVID-19 で亡くなった際、ご遺体がどのような扱いとなるのか。その中で寺としてどのように対応するのか。世間が自粛の中でどう心理的に変化しているのか、日常を持つことの大切さなど。
- ・檀信徒さんへのお見舞いの手紙を、甘茶を同封して送った(四月だったので)。お寺はいつでもお参りを待っているということ、こうした状況下でも、様々な形で手を合わせることは続けていきたいと思っているので、ぜひ相談して欲しいとお伝えした。また、お檀家さんとお会いした際には、皆のご先祖さまや、うちのお寺の歴代住職も、たくさんの苦難(戦争やコレラなど)を乗り越えて、今に繋がっている。だから今回も必ず乗り越えられるとお話している。

■家での実践、ともに実践のすすめ *一部抜粋

例)・世界各国の仏教者・宗教者が連帯して取り組んでいることを SNS などオンラインツールを通じて伝えている。目に見えない不安に対応するためのターラ菩薩マントラを、Zoom の相互方向機能で一緒に唱えている。

- ・御題目を唱えて他人の抜苦与楽を祈ることが、自分の心を安心させ、不安を取り去ることと常々伝えているので、コロナ禍用の具体的な祈りの言葉を伝え、寺院総出で 17 日間にわたって皆で祈りました。お線香 1 本を 40 分と数え、各家庭で御題目を唱えることを推奨しました。集計したところ加行した人は 666 名、2 万本分の御題目を唱えたことが、大きな連帯感と達成感を味わうことになりました。ちなみに最終日の 5 月 3 日は 3 月末以来初めて、当地での新規感染者がゼロになったことも感慨深かったです。

■今、仏教を伝える *一部抜粋

例)・法話や寺報で「この一件から、私たちが気づかされることはないだろうか」という視点を持つことの提起をしている。(例:集まることは宗教の大事な機能だが、一方で単に集まる、すなわち形通りに法事を済ませただけで何か仏に向きあった気になっていなかったか。老病死とは、もとより個人の問題ではないのではなかったか。

- ・仏教の基本は「人生は苦である」ということであり、たとえコロナでなくても病・死はやってくるとのこと。そのことを無駄に終わらせない、人生を渡ってゆくみ教えに出遇うことが大切であることを、ご門徒には高齢者が多く、ネット発信では届かないので文章にして手紙にて送付するなどしています。
- ・寺院での法要や門徒家庭での年忌法要・在家報恩講師での法話において、感染予防についての啓発とともに、人々の心にウイルス感染への不安や恐れによって疑心暗鬼を生まれ、それが容易に偏見や差別を産み出していくことの恐ろしさを伝えている。その中で仏教を学ぶことの大切さ、特に「四諦八正道」の特に正見・正思惟・正語・正業を実践することがいま求められていると伝えている。
- ・医学的な情報に関しては専門ではないため大手に言えない。しかし、法話において、「心」の感染症について説く。これからコロナウイルスとの共生を前提とした生活を余儀なくされるなか、新たな生活様式に適應できるよう、心の平安と他者への思い・祈り、三毒の戒めを特に伝えている。

■仏様・ご先祖様の尊さ *一部抜粋

例)・阿弥陀様もご先祖様方も、こちらの世の事情を全てお分かりになったうえ、こちらの世で辛い日々を送る私たちを大切に思ってくださっているということ。お寺の法要に同席できずとも、手向けた気持ちは阿弥陀様が必ず極楽浄土の大切な方々にお届けくださるということ。

■疫病と仏教 *一部抜粋

例)・新型コロナウイルス以降は、新たに蓮如上人の『疫癘の御文』を紹介しながら、地震・津波・台風・洪水・火山・飢饉・疫病と歴史上の出来事との関連性(ローマ・インカ・アステカ・モンゴル帝国や源平な

ど)や、誰もが知っている神話・伝説・物語(大江の酒吞童子や桃太郎、モーセの十戒、ヤマタノオロチ)などを交えながら宗教との関連性(御霊会→祇園を代表とした夏祭りや立正安国論、御消息など)をお話し、不安に苛まれて無用に他人を責めず、まずはお念仏唱えて心を鎮めるなど心の健康の保持に努め、改めてこの瞬間を感謝しながら1日1日をしっかり共に生きていきたいと思いますとお伝えしております。

■情報、差別、不安と向き合う *一部抜粋

例)・禅の「今・ここ」の心から援用し、膨大な情報の中で溺れないように、①自分がコントロールできること(手洗い等)にエネルギーを集中させる②メディアの情報に一定の枠を設ける(ずっとテレビを見たり、スマホを見たりせずに、時間もしくは決まった番組やサイトから情報を得る)③短い時間のスパンで考える(この1週間、今日一日等)といったことを伝えている。

■寄り添い

■日常のありがたさ *一部抜粋

例)・日常性の有難さ、当たり前だと思っていることが当たり前ではないことに気づくことの重要性を掲示板、法話で話しています。外出を自粛して、感染の恐怖を感じている苦しい時こそ、自分の人生を見つめ感性を磨くことが重要です。安全で、豊かで、便利な日常生活こそが決して当たり前でなく、人知を超えた様々な条件に支えられている神秘そのものであるということを伝えています。

■利他・他者とのつながり

■コロナウイルスの情報・対策 *一部抜粋

例)・ネットの配信で日々変わるコロナ情報を発信、仏教の視点での見解も添えています。ブログを書いています。フェイスブック、Twitter、WhatsApp、Mixiなどでシェアしています。

(12)あなたが今後取り組んでいきたいと考えていることについてお尋ねします。新型コロナウイルスに関して、檀家・門徒・信徒を問わず、人々にこれから伝えたいと思うことはありますか。あれば、どのような方法でどのようなことを伝えたいか教えてください。(245名から回答)

■方法・媒体の分類(複数記載可、記載のあるもののみ)

◇紙媒体:40(寺報、郵便物、掲示板他) ◇インターネット:93(HP、ブログ、SNS他) ◇口頭:24(法事・法話、月参り他)

■今だからこそ *一部抜粋

例)・怒りや偏見に吞まれずに、今こそ自分を調べてゆくこと、そのために坐禅や写経というような実践行を勧めてゆきます。

・死にたいしてリアリティを感じる時期だからこそ家族で人生会議をしていこう。

・見えない部分を感じられる、信じられる力を伸ばす、人間力の成長という部分で宗教の大切さを痛感した。損得感情が先行する現代において、どれだけ自分がすすんで損をできるか、布施をはじめとする六波羅蜜という修行をその意味合いを改めて檀信徒にはお伝えしていきたい。

■仏様の尊さ *一部抜粋

例)・本尊の加護が先祖の支えが変わらずに傍にあることを、毎日の勤行や檀信徒の墓参時などで感じてもらいたい。

・新型コロナウイルス蔓延により、無常観、病苦死苦が目の前に迫ってきたことを皆が強く感じている昨今かと考えます。その中で阿弥陀様の大慈悲、お念仏の有難さを説いていけたらと考えております。

■情報に踊らされない、差別をしない ■日々を大切に生きる、日常のありがたさ

(以下省略)

(13)上記以外にご意見や感想等ございましたら自由にお書きください。(158名から回答)*一部抜粋

■覚悟・心構え *一部抜粋

例)・僧侶即布教師。平時からちゃんと僧侶として活動していれば災害時でも基本は変わらない。全ての僧がスーパー坊主たるのは無理。所詮人間なので、檀家、信徒、希望者、手の届く範囲を全力で臨む。

・聖武天皇は天然痘の大流行後に国分寺、さらに明日への希望と祈りの対象として廬舎那仏の造立に全国民に協力要請をされました。約九年の歳月をかけ、1300年の時を経ても堂々たる姿で国民の誇りであり続けている大仏が完成されました。現在では治療薬の開発や公衆衛生の知見は蓄積され

るでしょうが、心のよりどころや文化の象徴的な存在となる大仏を建立することは不可能でしょう。病
気対策としては医療関係者が命を懸けて尽力されています。生活保障は政治家に頑張ってもらうしか
ありません。現代の宗教者に何が可能かを自らが問い、納得してもらう答えを言葉と行動で示すこ
とができるか否かが問われていると思います。

- ・今回のことを機に、幸福のあり方を見直す風潮が増して、地方に目や足が向くことを期待していま
すし、町内の幸せな雰囲気作りのために尽力していきたいと思います。
- ・過剰に反応しないこと。長い歴史の中で、さまざまな困難も変化も私たちは経験してきました。諸行無
常の世の中なのだから、私たちもそれを冷静に受け止めなければなりませんよね。宗派的な考えも大
事ですけど、四諦・八正道といった根本的な所を見つめ直してみたいと思っています。変化は恐ろし
いことでもあります、希望もあるかも知れません。
- ・今回の出来事は、大切な気付きを私達に与えていただけた事のほうが大きいと思います。ひとり一
人がその気付きをキャッチし、プラスと変え未来にこの継がれた命を繋ぐ架け橋になりたいです。
- ・地域での存在感を出す為にスローガンを載せたロゴマークを作成しました。地域での存在感が薄れ
ると新型コロナ禍後、求心力が薄れて寺院運営に影響が出かねないので、やれることはやり、新しい
ことを取り入れてこの状況に順応していくよう努力するタイミングだと思っています。取り返しのつかない差
が出来る前に頑張っようと思っています。
- ・社会の混乱は、停滞していたものに対する変化を促し、その変化を許容させる下地を作る。オンライン
化が遅々として進まなかった学校の授業は、コロナ禍により一気に加速した。それは、休校中の子供た
ちだけでなく、今まで不登校や病気などで学校に行けなかった子供たちに学ぶ機会を与えるものにな
るはずである。同様に、お寺のオンライン化がこれまで奨励されることはなかったが、このコロナ禍を契
機に、今まで仕方ないと諦めてきた人が画面越しにでも参列できるようになったとも考えられる。決し
てデジタルに強いわけではないが、それを理由に聞法の機会を奪うことはあってはならないと思い、
日々パソコンとにらめっこしている。
- ・寺院が試されていると思います。良い意味で淘汰され社会に無用な僧侶や寺院はなくなっていくと思
う。各宗派も今後真の意味での信仰と教化や人間の迷い苦しみに手を差し伸べることができる。また
そう期待される試みを連携して取り組んでいく必要がある。

■ 経営的不安・課題 *一部抜粋

- 例) ・政府のコロナ対策について、声を上げたものだけは対応改善する傾向があるように思う。こと公益宗
教法人については持続化給付金制度の対象外となり、収益事業関連については対象という、何とも
本末転倒な結果となっている。政教分離原則論を盾としても、相当程度を超えない範囲においては、
政教分離原則を唱える憲法違反とはならないにも関わらず、何かを恐れてか、政治家識者等、宗教法
人に対しての救済論は一切出てこない。持続化給付金制度の趣旨からして、宗教法人にも適用され
る雇用調整助成金制度と同様であることは明白であり、特定の宗教団体を支援するものでもないの
で、一律の制度として特例を設けず一法人一被雇用者を救済して欲しい。対面的活動が多い分野に
て、多くの寺院が苦境に立っていると思います。
- ・収入が激減し、今後も自粛が続くと寺院経営が危うくなる。綺麗事ではどうにもならない。宗教法人に
は助成金や補助金が無いのか？少なくとも本山への義務金の免除など、このような調査結果を踏まえ
て、各宗派本山へ呼び掛けていただきたい！
 - ・法務が減り、寺院運営の基盤が揺れている中、本山からは通常通りに近い御依頼金がかかるのではな
いかという心配が大きい。「猶予期間を設ける」のではなく、本山の大幅な歳出削減による御依頼金
の減額、末寺の負担軽減策が必須と考えるが……。
 - ・拙僧は今回の騒動が一過性のものに終わらないと考えている。おそらくこの騒動を切掛にして棚上げ
されてきた寺院の問題が表面化するのではないかと踏んでいる。例えば、核家族化に伴う菩提寺との
疎遠、寺族によるどんぶり勘定に伴う不正確な収支計算と予算組み、葬式・参拝・付け届け便りの寺
院財源の揺らぎ、人々の新たな死生観の拍車と菩提寺との関係希薄化、などの問題である。今まで宗
教界において当たり前、当然、常識とされていたことが通用しなくなる日が来よう。今はコロナ終息の
ために感染拡大防止を最優先にするのは当然であるが、今後必ず次の時代を本格的に見据えなけ
ればならない。ただ、本来ならば伝統的な方式で運営していきたい……すぐに改革するなど内心抵抗

がある……少しずつでも調整して生き残り策を模索し続けなければ、中小寺院は寂れてしまうだろう。このような緊張感が日々張り巡らされている今日この頃です。

■オンライン化への危惧 *一部抜粋

- 例)・コロナウイルスの蔓延により、今後リモート会議や、もしかしたらインターネット法事、葬儀等あるうるかもしれない。コロナウイルスの蔓延を防ぎながらお寺が存続するためには致し方が無いと思う。その上でインターネットでのやり取り等をするにあたり、安価で多くの方にも簡単に使いやすいアプリやソフトが開発されることを望みます。しかしながら、批判もあるかもしれないが、収束後も同様にこのようなやり方を続けるのではなく、ウイルスの流行に照らし合わせながら、昔ながらのやり方、寺院に招いての読経や各お宅を回る棚経などはやめてはいけないと思う。時代遅れな考え方もかもしれないが、近い距離での向こう三軒両隣の人間関係こそが寺院の強みだと思う。法要、法式などの際の僧侶との相談などは檀家さんにとっての貴重な相談の場所だと思う。また、私もそうだが、お年寄りや子ども、障がい者等の中にはタブレット端末やPCが得意ではない方もいて、費用も高価でエンドユーザーの方々には使い勝手が良いものであるとは思わない。
- ・オンライン化（法要の動画配信や、リモート葬儀など）の動きは、新たな布教方法として寺院にうかがえない檀信徒の望みにも応えることが出来、確かに良い試みであるとは思いますが、これを機に「寺院に行かなくても、オンラインで済ませればいいじゃないか」となってしまうのではないかと不安もあります。また、会席などが減少することで、縁の希薄化などが促進され、家の継承観念が檀家の存続に影響を及ぼすのではないかとこの点も懸念しております。

■危機感・不安 *一部抜粋

- 例)・コロナウイルス感染、及び、コロナウイルス終息あとに本当に仏教は必要なのか。危険をおかしてまで参拝する必要、葬儀をする必要があるのかと問われたとき、答える言葉が見つからない。
- ・この地域では、歴史的に、寺院は、信仰の最前線というよりは、地域の結束の象徴であった。それが、地域の役割が縮小するとともに、寺院の存在意義が失われてきている。コロナはきっかけではなく、トドメであるように感じる。
 - ・宗教的な価値観が求められる時代に突入した感じします。しかし、その価値観を求める方が多くおられても、伝達手段が、過去のままでは、手も足も出ないと痛切に感じています。新しい価値観の中、新しい伝達方法をどう模索していくかが課題です。また、諸行無常で、情報が刻々と変化していく中、お寺の対応も変化させなければなりません、間違ふこともあると懸念しています。

■連携への期待 *一部抜粋

- 例)・寺院のみならず宗教全体の存亡に関わる出来事です。各寺院が成り立たなければ、宗派及び総大本山も経済的に困窮し、厳しい状況に陥ります。宗派宗教を超えた対応が必要です。

■宗門への期待・不満 *一部抜粋

- 例)・寺院も各宗派の本山がもう少し対応を早くすべきだと思います。うちの宗派は自民党に輪をかけて対応が後手後手なんです。
- ・釈尊や先師の経験には感染症と類似した事柄から対応策の教えが説かれている部分もあるが、僧侶が学んでいないからか仏教者の意見が世の中には出てこない。寺院単位でもそうだが宗派としても何もないことは如何かと思う。
 - ・宗庁がもっと率先して各寺院を護るための対策や支援を打ち出し、広報しなければいけない。経済の悪化と葬送儀礼の縮小化で今後ますます寺院運営が厳しくなることが予想されるなかで、これまでのような放任主義的なありかたを改めるべきだと感じております。



「第3回新型コロナウイルス対策セミナー」アンケート集計結果
 (アジアアクセス・ジャパン提供のデータを日本宣教リサーチが集計)

【調査概要】

- ・方法:インターネットによる WEB アンケート
- ・実施日:2020年7月8日(木) ・有効回答数:81名

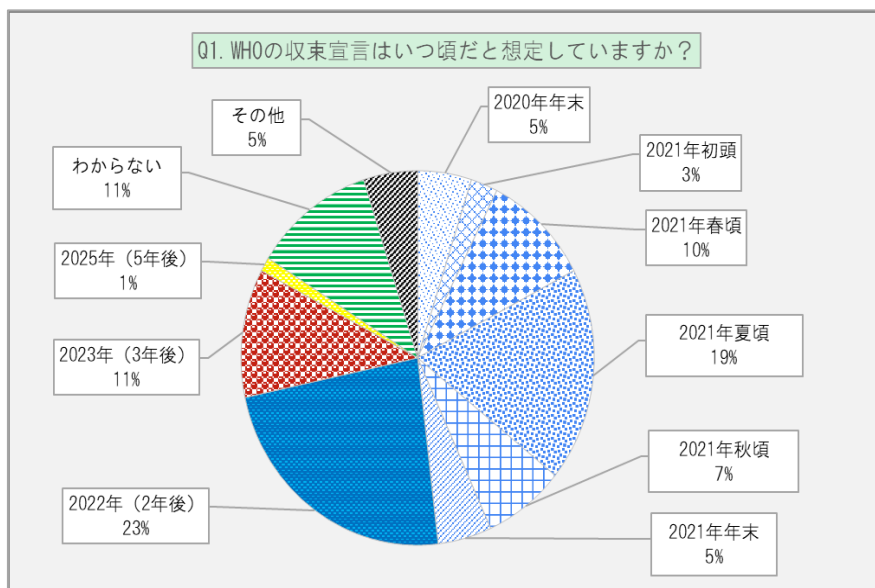
【回答者】

都道府県名	牧師・宣教師	スタッフ	神学生	信徒	都道府県名	牧師・宣教師	スタッフ	神学生	信徒
北海道	3				滋賀県				
青森県	1				京都府	2			
岩手県	1	1			大阪府	4	1		
宮城県	5				兵庫県	8		1	
秋田県					奈良県	1			
山形県	2				和歌山県	1			
福島県					鳥取県				
茨城県	6			1	島根県				
栃木県	1				岡山県				
群馬県	2				広島県	1			
埼玉県	3			1	山口県	1			
千葉県	1				徳島県				
東京都	9	2			香川県				
神奈川県	5				愛媛県				
新潟県	1				高知県	1			
富山県					福岡県	1			
石川県	2				佐賀県				
福井県					長崎県				
山梨県					熊本県	5			
長野県					大分県				
岐阜県					宮崎県				
静岡県	2				鹿児島県				
愛知県	2				沖縄県	1			
三重県					海外	1	1		
					計	73	5	1	2

【回答】

Q1. WHOの収束宣言はいつ頃だと想定していますか？

収束宣言の時期	回答数
2020年年末	4
2021年初頭	2
2021年春頃	8
2021年夏頃	15
2021年秋頃	6
2021年年末	4
2022年(2年後)	19
2023年(3年後)	9
2025年(5年後)	1
わからない	9
その他	4



Q2. アフターコロナには、どうなっていることを望んでいますか？自分自身、教会、日本どの点でも結構です。

【回答】 ()の数字は、内容が同様の回答数

- ・日本中の人々が霊的飢え渇きを感じて主を慕い求めている。(9)

- ・もとの会堂中心、教職中心ではなく、自分たちこそが教会と受け取った兄弟が日常でキリストを生き、教団教派を超えて神の国のために繋がり合い、社会の中で貢献する教会の姿。
- ・信徒牧会者の導くコミュニティが増殖すること
- ・教会がますます福音の素晴らしさを体験し、宣教の力に満たされ、用いられるように(5)
- ・教会堂での礼拝、交わりが出来ることがベストであるけれども、教会に集まる事が出来なくなっても、しっかりと各家庭で礼拝がしっかり守れる教会員になっていく事が大切。またネットを通して、教会の礼拝、祈禱会、信徒通しの交わりが出来る環境を信徒に整えていくことが大切。ただし、年配の方はむずかしいかも。でも啓発していくことも大切。また簡単に接続できるようなシステムを構築していく必要がある。直接会って人間関係を作ると共に、電話、ライン、ZOOM、スカイプ、YouTube などを利用して交わる両面が必要になってくる。両方のメリット、デメリットを理解しつつ活用していくべきだと思う。
- ・家庭礼拝など地域ごとの主にある集まりが継続される。オンラインによるハイブリッドなフェローシップや弟子訓練が拡大し続ける。
- ・自分自身は、主に役員や教会のミニストリーリーダーと、以前よりも親密な関係になっていることを望む。また、地域の宣教ネットワークが以前よりも”宣教のために繋がり合おうという空気”になっていることを望む。
- ・教会メンバー相互の絆が深まり、さらに祈り合う神の家族となっていくようにと願っている。
- ・教会の観点で：牧師中心のピラミッド型から、教会員やグループ(セル・家の教会など)中心のネットワーク型の教会形成へ。今回のような状況によって大きく左右されない、働きがストップすることにならないような形へと移行すること。(5)
- ・新しい形での伝道、礼拝を教会が見つめ、オフラインとオンラインを生かした形で歩んでいく。(2)

Q3. そのために、今から意識的に取り組み始めたことはありますか？

【回答】

- ・教会とは何かと、キリスト者は何のために召されてこの時代に置かれているかの繰り返しの確認と励まし。
- ・教会員の意識改革を進めていく必要がある。まず、伝道して未信者を教会に連れてくる。それから各家庭や複数の家庭が集まったところでの礼拝が出来るように意識改革を進めていく。
- ・時間の使い方の変革。教会のオンライン、動画コンテンツのために必要な機材、人材確保のための戦略作成。
- ・礼拝の捧げ方、今まで持っていた諸集會の見直しとインターネットによる信徒の交わり。
- ・実際に教会に来れる人たちだけではなく、来れない人たちをフォローしていく中から地理的な障壁を意識せずに Zoom や LINE など人とつながり、建て上げることに取り組み始めた。
- ・教会内ではある程度リーダーやミニストリーのキーパーソンに絞って密に連絡を取ったり、コーチングタイムをしている。宣教ネットワーク構築のために、定期的に同世代の牧師達とオンラインで時間を過ごすようになった。
- ・コロナを通して Zoom での礼拝へと導かれ、その中で礼拝の最後に小グループに分かれて互いに祈り合う時間を持つようになった。今後もその時間を大切にしていきたいと思っている。
- ・教会員がオンラインツールを使用できるように使い方を教えること(マニュアルの作成)。まだ、実際にはスタートしていないが、教会員が相互ケアできるような形への移行。それぞれが宣教の拠点となるような、個人伝道の1対1のOJTのような弟子訓練などを今後、進めていく。
- ・「新常态」(New Normal)に対応した ICT 技術やサイバー・フィジカル・システム(CPS)等の活用方、或いはサイバー・チャーチやバーチャル・リアリティーによる教会形成等の調査・検討

Q4. 今までやっていたことがコロナによって止まってしまう、そのまま辞めようと思っていることはありますか？

【回答】

<ある、の回答例>

回 答	
ある	39
ない	35
その他	7

- ・形式的な礼拝、教会主義。平日の礼拝
- ・礼拝堂ぎゅうぎゅうに座っての礼拝(複数回に分けて礼拝をささげるようになった)
- ・40分程のボリュームミーなメッセージ。長い説教
- ・役割を終えている委員会、月例の信徒会、複雑な教会運営
- ・教会に於けるいくつかの定期集會。壮年会、婦人会。イベント中心の教会活動

- ・週報、週報 BOX、超伝統的な婦人会、牧師主体の伝道体質、やった気になるイベント型伝道
- ・そのままやめるのではないが、ポストインの戸別配布など、習慣的になっている活動や行事の見直し。
- ・教会内での子供向けゴスペルクラスや英語レッスン(伝道向け)

Q5.教会の宣教は、どのようになされていますか？

【回答】()の数字は、内容が同様の回答数

- ・セルグループの自然発生的な拡大、1対1の人づくり。家庭集会、小グループと個々の生活伝道(5)
- ・小グループのオイコスに対する宣教。不安の中にいる人に寄り添い、救いに導かれた人がいる。また、以前からスポーツミニストリーで関わりのあった遠方の方にオンライン祈り会に参加してもらい、そのままオンラインで信仰決心に導くこともできた。
- ・今までのやり方+SNS を駆使する戦略的宣教。ストリームを一般公開する、YouTube、教会 HP などの強化・整理。YouTube 配信。Zoom のミーティング。(4)
- ・まだまだこれから。未信者がインターネット礼拝を見てくれているので、どのようなフォローができるか検討中。公式ラインを作成し、未信者と牧師がやりとりできるような環境構築も検討中。
- ・今年いっぱい、集会的なものはすべて中止になったので、教会員の意識的にも家族伝道を中心という流れ、雰囲気が起こってきている。(自粛中に行っていた Zoom でのオンライン祈禱会で分かち合われることが、家族への伝道のことが中心だったので、これを良い機会として、その方向でそれぞれを励ましながら取り組んでいけると、すでに、メッセージや祈禱会などでは、そのような促しを始めている。(5)
- ・依然とあまり変わっていない。手紙、電話などの今まで通りの仕方。YouTube ライブ配信の礼拝を開始したので、それを見る方が少し増えてきた。その他はあまりしていない。(7)
- ・個人的なつながりや交わりを中心とした、会堂の外での宣教を考えている。一人一人の派遣意識を高めることにより、家族、同僚に分かち合っていくこと。(15)
- ・信徒が自発的にやりたいと思っていることを組み取り、地域に開かれたカフェやトラクト配布などを行っている。また、1人1人が「教会である」という意識をもち、遣わされた場所で福音を伝えられる関係を作れるようにしている。

Q6. 主日礼拝として集まる拠点(主を信じる人が2人以上)は、コロナウイルス前と後でどのように変化しましたか？個人でネット礼拝を見る数は含めないでください。(省略)

Q7.霊性ないし霊的成長において、課題と感じていることはどのようなことですか？

【回答】()の数字は、内容が同様の回答数

- ・全てがオンラインによる集会になったため、IT 関係にうとい方々やネットに対するアレルギーのある方々は、霊性を維持するだけの余裕が得られなかった。また、慣れないオンライン集会の当初は、接続に手間取ったりして時間が無駄になった。また、オンラインの場合、一般の集会のように、参加者のレスポンスを受けづらい分、説教者としての霊性を持続したままでの説教の難しさを感じた。
- ・教会堂での礼拝が出来なくなった時に、一人で家庭礼拝を持たれる方の中に、精神的にまいってしまい、鬱的になった方がいた。週報、メッセージ CD 等を毎週送っていたが、信徒同士の交わりが出来なかったことが大きく原因していると思う。
- ・教会員の信仰が振るわれていること、若い層の礼拝離れ、ネット環境を使えない教会員へのフォロー、聖餐の持ち方。
- ・メンバー同士の交わりの機会がものすごく減ったので、交わりを通した霊的成長を今後どうやって見ることができるかは課題だと思う。
- ・集まる/集まらないという変化の中で、それぞれの集会や礼拝の考え方や意識が明確になっているように思う。その中で成長する/しないの二極化のようなものが見えてくる。
- ・個人レベルの弟子訓練の学びとトレーニング。信徒リーダーの育成(4)
- ・会堂での礼拝が再開したが、家々での礼拝の経験をいかに生かしていくかが課題となる。ソーシャルディスタンスを確保して会堂での礼拝を維持することも課題。また直に対面しての交わりの不足も課題。
- ・教会に集えないため、コンタクトがなかなかとれない人が増えたこと。とくに、Zoomで集まったりするのが苦手な人。また、仕事や生活が乱されているため、安定した信仰生活を送れない人がいる(とくに大学生)。そして、自宅での時間が増えて、生活の乱れがあったとしても、その霊的な状況が見えにくいこと。

- ・オンラインの在宅礼拝から会堂礼拝に戻ることに難しさ。共同体意識の減少への懸念
- ・ノンクリスチャンの家族と住んでいる人はなかなかオンライン礼拝も自由にできずにいる。
- ・礼拝を一人または二人で、オンラインで観ることで信仰生活のすべてが満足してしまいそう。子ども達の信仰継承、教育を家庭と教会が協力してやること。
- ・オンラインで礼拝のみに出席し続けている求道者の人の様子がわからない。家での礼拝は受身的になってしまうところがあるので、ネット礼拝に完全に慣れてしまった人たちが交通費と時間をかけて礼拝に戻ってくるのか心配になる人もいる。礼拝はささげるものであるとネットで流れてくるもの、という意識になることは問題だと感じている。
- ・ネットを通じてのコミュニケーションの難しさ
- ・信仰の弱く、しかもインターネットを使えない年配の人たちが、教会とのつながりを持ちにくくなっている。
- ・「新常态」(New Normal)に対応した教会形成や宣教方策、宣教協力の在り方の調査・検討

Q8. 霊的成長において、助けとなっていると感じている取り組みがあれば、いくつかお分かち下さい。

【回答】()の数字は、内容が同様の回答数

- ・それぞれの家庭を礼拝の場、教会とする意識をもって生活をする。
- ・セル単位で支え合い励まし合う機会が劇的に増えた(その必要性が高まったため)。(4)
- ・Zoom を使った小グループの交わり。(ユースや地域など)今のそれぞれの状況を分かち合い、祈りの課題や葛藤をシェアして祈る時間を持った。
- ・礼拝の中での救いのお証しタイム。先日、他教会のクリスチャンの方に Zoom で礼拝に参加していただき、救いのお証をしていただいて大変励まされました。その方は海外在住の日本人クリスチャンでしたので、礼拝時間も重ならず実現に至りました。
- ・青年たちが、デジタル機器の使用のために高齢者に仕える機会が与えられ、青年たちの成長のチャンスが与えられている。そして、そこに年代を超えた交わりが出来ている。オンラインでより多くの人々が、礼拝や学び、訓練に参加できるようになっている。伝道対象者や開拓の拠点等について広がった考えを持てるようになっていく。
- ・Zoom や LINE での弟子訓練は、集中ができて対面の訓練よりも充実した感があった。一方、回復期に当たっては、集会に参加出来ない人たちのために、オンライン配信が継続され、今まで集会(礼拝・祈祷会)に出られなかった方々で、オンラインでは出席出来るようになった方が起こされている。精神的な理由で、人と会うことが出来ない状態の時でも、オンラインでは集会に出席が可能となった方もいる。また、祈祷会や小さな集会では、ブレイクアウトルームで小人数での祈りや全体での祈りに対しても、祈りがたいへん充実して良かった。Zoom での祈祷会は、アフターコロナの今後も続ける予定。
- ・オンラインによる聖書の学び、弟子訓練、祈り会。また、コロナ禍での情報弱者への訪問などの奉仕。
- ・全員ではありませんが、子どもの伝道ミニストリーにたずさわる学生スタッフとのみことばの分かち合いの時間を月一回集まって、あとは、少人数でわかれて LINE で分かち合いをしている(現在は「みことばの光」を使用。)
- ・LIVE 配信の礼拝は、意外と一体感を持てている。ノンクリスチャンの家族も、礼拝に参加しやすくなっているようである。LINE での小グループの集まりは、家で参加できるからかもしれないが、参加率が増えている。また、励まされている。
- ・祈り会を休止した代わりに、ショートメッセージを配信するようにした結果、祈り会に参加していなかった人々も家庭で祈りの時間を持つようになった
- ・教会員の全員が、礼拝説教の応答を分かち合って近況も話して祈る時間を礼拝後に持っている。毎週グループのメンバーを変えることで新鮮味を保てるし、リーダーが育っている。
ユース(中高生)が4月から Zoom で毎日繋いで一緒にディボーションをしたことで、ずっと課題だった毎日聖書を自分で読む、という習慣が少しは続いている(と信じている)。
祈祷会メッセージを牧師がコロナ禍において大切なことを毎回話すようにしているので内容が深められ霊的な養いになっている。今は積極的に出ていく伝道は難しいけれど、家庭に遣わされていることを覚えて自身の信仰を深め整え、身近なところに自然に証し伝道していくよう促している。
- ・未信者の家族と一緒に礼拝を捧げてくれるようになり、それによって信仰が励まされていることを多く聞く。
週一のディボーションを YouTube にアップしている。

中外日報の新聞記事から【2020年4月～2020年7月】

新型コロナ禍後の世界 「いのち」重視の社会を期待

時事評論 2020年4月24日
大阪大教授 稲場圭信氏

新型コロナウイルスが世界で猛威を振るう。この感染症との地球規模での戦いにおいて、コロナ禍の後の社会についての言説がある。地政学的リスク分析が専門のイアン・ブレマーは、9・11 やリーマン・ショックは世界を揺るがしたが、今回の感染拡大が与える影響はその比ではないと指摘する。世界秩序の機能不全、脱グローバル化、自国第一主義の高まり、格差のさらなる拡大。非常に暗い、ネガティブな見解だ（日経、4月16日）。

一方で、ポジティブな言説もある。『銃・病原菌・鉄』の著者ジャレド・ダイヤモンドは、この感染症との戦いには国際的協力体制が必要と、共生社会への希望を語る。「世界的な問題を解決するモデルになり、核や気候変動、水産資源の保護といった課題に国際社会が協調して取り組む契機になるのが最良のシナリオだ」（日経、同13日）

フランスの経済学者・思想家ジャック・アタリも同様だ。共感、利他主義への転換を呼び掛け、「生きる」ために必要な食料、医療、教育、文化、情報、研究、イノベーション、デジタルなどの産業、すなわち「命の産業」に重点をおく「ポジティブ経済」への転換のチャンスと社会の行方を明るく展望する（NHKE テレ「緊急対談 パンデミックが変える世界」同11日）。

世界の歴史は、戦争、自然災害、疫病など人類の危機であふれている。しかし人類の営みは連綿と続いてきた。今回のパンデミックも何度かの波が過ぎ去れば元に戻るだろうか。否、戻れないだろう。多くの人の世界観、人間観、死生観に大きな影響を与えている。意識変容、行動変容、リスクへの対応の変容は、ライフスタイルも大きく変容させる。新たな時代が始まる。マックス・ウェーバーの「エートス（行動様式）」、そして、ロバート・ベラーの「心の習慣」しかり、容易には変わらないもの、それが、このコロナ禍で変わろう。

14世紀の黒死病大流行が中世ヨーロッパの転換点となり、ルネサンスや宗教改革につながった。教会の権威が失墜し、ボッカッチョの『デカメロン』に描写されたように刹那的、享樂的に生きる人もいた。一方で「メメント・モリ（死を想え）」、神への直接的な信仰心が深まる人もいた。

今、生死をさまよっている人がいる。命を救う現場で尽力する医療従事者がいる。生きるために必要不可欠な部分を支える職務を続ける人がいる。また、仕事がなくなり生活困窮状態の人も出ている。一方で、新型コロナウイルス感染拡大防止のために外出自粛でテレワークやウェブ会議をする人が急激に増えた。何が不要不急で、ムダなのか。コロナ禍が社会、組織、個人に仕分けを強いる。何が本質的に大事なのか。

新海誠監督の映画「天気の子」の結末では、関東は大雨が何年も続き、都心の海拔の低いところ大部分は海に沈むが、日常生活も続く。コロナ禍は、第2波、第3波があっても、いつかはインフルエンザのように共生していく。しかし私たちの生きる社会は変わる。利益効率重視の社会ではない、「いのち」重視の社会だ。宗教には世直しの思想もある。「いのち」を尊ぶ教えは、私たちの生き方を救ってくれるであろう。

コロナと「新しい生活様式」 分断超え人間関係構築を

時事評論 2020年5月15日
東京工業大教授 弓山達也氏

本稿執筆の5月10日、一日の新型コロナウイルス感染者数は下降し、終息にむかっているかのように見える。だが社会全体は依然厳しい状況で、宗教界も同様である。行事の中止や施設の閉鎖などが相次ぎ、ある教団関係者の「この事態が終わっても、足が遠のいた信者がすぐに戻るかは判らない」というつぶやきに接した時、筆者はこの重大さと長期にわたる影響に改めて気づかされた。

政府の専門家会議が5月4日に「新しい生活様式」を提言した際、60歳以上の方はどこかで聞いたことがあると思ったはずだ。戦前の農村経済更生運動、敗戦まもない頃の生活改善普及事業、その後の新生活運動など、一般に「生活改善運動」と総称される国家事業がこれまで何度かあった。

戦後の生活改善運動は宗教界と無関係ではなかった。民主化や合理化のもと、迷信や虚礼廃止が唱えられ、冠婚葬祭、特に結婚式や葬儀の簡素化が行われた。筆者は長野市のある地区の成人式の写真集を見たことがあるが、生活改善運動で着物姿が皆無となり、全員が平服で写真に収まっていた。

生活改善の対象は多岐にわたり、農業改良や衛生管理のような「便利」に関することは定着しやすく長続きするが、人間関係や価値観に関わることは長続きしない。先の成人式の平服化も数年ほどで着物姿が現れ、5年ほどで元に戻っている。上からの指導では便利なものは受け入れられるが、人間関係や価値観を変えるまでには至らない。

今般公表された「新しい生活様式」は「3密」の回避をはじめとする外形的な諸条件である。感染者数が増えれば守られるが、減れば緩む(緩めなければならない)。しかし私たちは知っている。新型コロナウイルスは、たぶん長期にわたる人間関係や価値観を左右するものだという。これに抗する、いや付き合うためには、上からの指導ではなく、私たち自身が下から自らの生活様式について創意工夫を凝らしていかなければならない。

「新しい生活様式」は移動の制限や身体的距離の確保を指示する。だが重要なことはそうした分断を超えてどう私たち自身が関係を維持していくだろう。SNSだけでなく、前時代の電話や手紙の力を再確認した人は少なくないはずだ。

「新しい生活様式」はエチケットやマナーを強調する。確かに他者への配慮は大切だ。そこをもう一歩進めて、この事態だからこそ生じる苛立ちや憎しみを心ない言葉や書き込みで表していないか注意したい。

「新しい生活様式」は消費や労働の新しいスタイルを提案する。確かに最初こそ戸惑いのあったテレワークや買い物の不自由さにも慣れた感がある。ただ忘れてはいけないのは、こうした事態でなくても不自由さを抱えた人やステイホームと言っても還る家のない人や、働かなければ社会が回らないエッセンシャルワーカーがいるということだ。

第二波も予想されている感染症と、その都度出される上からの指導との狭間で翻弄されてはいけない。「会えないこと」や死の意味も含め、私たち自身が自らの人間関係のカタチと価値観を模索していく必要があるのだろう。

ポスト・コロナの地球意識 消費抑制は温暖化阻めるか

時事評論 2020年5月29日

東京大教授 堀江宗正氏

コロナ危機と環境については多くの記事・論説が出ている。東京新聞の社説は、コロナ禍による非常事態宣言以前に、「気候非常事態宣言」が出ていたと指摘する(4/29)。複数の国家、自治体、大学、それにローマ教皇も宣言を出した。日本の記録的暖冬もオーストラリアの森林火災と連動していた。

温暖化との関係も複雑だ。熱帯に適した感染症が北上するだけではない。長崎大の山本太郎によれば、温暖化と開発によって野生動物の生息域が狭まり、人との接触が増えた結果、新興感染症が起きているという。またコロナ危機による経済活動の抑制は、温暖化の抑制につながる。ピロル国際エネルギー機関事務局長は、サステイナブルな投資が増えると期待する。対して、有馬純は、気候変動対策のコストを経済的苦境にあえぐ各国が引き受けるのは難しいと指摘する。

ポスト・コロナの世界はこのまま消費抑制に向かうのか、反動で消費爆発に向かうのか。昨今の中国は後者だが、感染の再拡大が懸念される。前出の山本は、ウイルスは撲滅できず、共生しかないという。東京での抗体検査は陽性率が0.6%しかいなかった。抗体保持者から経済復帰するというわけにいかない。感染覚悟の経済再開となる。感染しても抗体がでにくいのなら、再感染の可能性がある。このパンデミックは大きな波ではなく、都市単位で第n波を短い周期で起こし、経済の長期的抑制と再編をもたらすだろう。

産業革命後の働き方は、1カ所で大勢の労働者が管理されながら働くものだったが、コロナ後はテレワークが一気に拡大した。広井良典はこれを機に地方分散と地域循環の経済にシフトするよう訴える。大都市集住の緩和は、災害リスクの軽減にもつながる。

過去の感染症は、大都市集住と関連していた。それは感染者を疫神に取り憑かれた悪しき存在として排除する宗教的態度と、病み苦しむ人に手を差し伸べ、救済する宗教的態度の2種類を育んだ。医学が進歩すると、信仰治療は不要になる。宗教による非科学的な対処が感染を広げる例が今回も複数報告されている。

感染拡大が懸念される後進国で信者を抱える宗教は、適切な予防策を指導し、死者を断罪せず、遺族に寄り添う姿勢が求められる。

科学に対抗して集会を断行する宗教は狂信的として支持を失いつつある。逆に祈りに関するネット検索が急増し、オンライン礼拝・伝道が米国では盛んだ。国連は自宅待機中の職員に瞑想をすすめた。ニュースウィーク誌の D・ファーリーは不透明さを受け入れる仏教に注目しコロナ後は世界観が変わると予測する。自宅待機者はスピリチュアリティへの関心を深めうる。

コロナ危機は人の移動を抑制するが、各国共通の苦難は全人類の連帯感や地球意識を強めるかもしれない。英国のブラウン元首相は世界政府樹立を呼びかけた。科学と政治が一体化し、市民は両者に服従せざるをえないが、不信も抱いている。不安に乗じて非科学的な治療や陰謀論を説くのではなく、科学と共存しつつ、政治と一線を画するリベラルで理性的なスピリチュアリティが存在感を増すに違いない。

人間が「決定」する「リスク」「安全」と「安心」への対応を

時事評論 2020年6月12日
大阪大教授 稲場圭信氏

新型コロナウイルスによるパンデミックは、どのような「リスク」か。ドイツのメルケル首相は3月18日、テレビで呼びかけた。「誰もが等しくウイルスに感染する可能性があるように、誰もが助け合わなければなりません」「全員が当事者であり、私たち全員の努力が必要なのです」(駐日ドイツ大使館 HP)。

国際通貨基金は、4月に発表した世界経済の見通しにおいて、今回の危機は他に類を見ないものであり、「世界のどこかで感染が起きているかぎり、感染の第一波が収まったあとの再流行を含めて、パンデミックの影響を免れる国はない」と指摘している。

感染症拡大防止のために多くの宗教施設が法要や集会などの自粛をした。実質的に集うことを避け、Web会議システムによる同期型や動画による非同期型での対応も進んだ。そして、緊急事態宣言の解除後も、危険が完全に過ぎ去ったわけではないので、恐る恐る手探りをするように平常化のプロセスを歩みだした。

一方、海外では、自分は神を信じているから感染しない、神が危険から守ってくれるといった言説もあった。しかし、パンデミックや大災害などの危険はあらゆる人にふりかかる。ドイツの社会学者、ベックは近代化により安全地帯で暮らせる「私たち」と危険なところにいる「他者」という構図は崩壊したと指摘した(『危険社会』)。

危険と似た言葉で「リスク」がある。社会学者のルーマンは、起こりうる損害が外部の環境に帰属する場合を「危険」と規定し、起こりうる損害が人間の「決定」に帰属する場合を「リスク」と呼ぶ。「危険」は個人が何らかの形で制御できないものであり、まさに大地震やパンデミックは「危険」に分類される。それは、個人の選択決定によって避けることができるものではない。しかし、パンデミックにあって、個人が、あるいは組織の構成員が感染するか否かは、ある程度、組織と個人の行動の選択と決定に帰責するため「リスク」とも言える。

「リスク」があっても組織への「信頼」があれば、あるいは宗教指導者に対する「信頼」があれば、その構成員は「リスク」を取ることができる。しかし、宗教的救済観により、神が守ってくれるからと感染症対策をせずに宗教施設を開くことは「危険」だ。宗教施設としては、感染症対策をとることが第一である。それでも感染してしまった人には、責任を追及するのではなく、社会が対応する。

14世紀の黒死病大流行で教会の権威が失墜する一方、メント・モリ(死を想え)が語られ、神への直接的な信仰心を深める人もいた。今、宗教者はどう対応するか。宗教施設での活動を再開することには確かに「リスク」もある。

一方で、自粛のままでは、別の「リスク」も膨らむ。信者の不安に対応できないシステムは、崩壊、消滅するからだ。前のめりになり、「リスク」を無暗な覚悟を持って振り払うのではなく、正しく恐れ、感染防止の「安全」対策を講じたうえで、段階的に開いていく、信じる者に「安心」を与えていくことが大切だ。苦に寄り添ってきた宗教は、今回の危機も乗り越えてゆくであろう。



カトリック中央協議会

教皇庁生命アカデミー コロナウイルス感染拡大に関する新たな文書を発表

教皇庁生命アカデミーから、コロナウイルス感染拡大に関する新たなメッセージが7月22日付で発表され、同アカデミーのサイトにおいて、イタリア語、英語、スペイン語、フランス語、日本語で公開されています。

現在の悲劇に過度の消費主義の影響を読み取って回心を促し、国際協力と連帯を強く訴える文書です。

教皇庁生命アカデミー

パンデミック時代における人間のコミュニティ:

生命の復活についての季節外れの省察

Covid-19 は世界に悲嘆をもたらした。我々はすでに長い悲嘆の時を過ごしているが、まだ終わっていない。それはさらに長く続くかもしれない。我々はこの事態をどのように解釈できるだろう？ 我々が勇気をもって立ち向かうよう求められていることは確かである。ワクチンと、大惨事を引き起こした原因の綿密な科学的解明の研究が、それを証明する。しかし我々は、より深い自覚も求められているのではないだろうか？ もしそうなら、現在我々が強いられる人との距離は、どのような仕方で、我々を無関心、あるいはいっそう悪いことに、諦めによる黙認という無気力に陥らないようにするだろうか？ ただじっとしていることとは別の、慎重な「一步後退」、すなわち、生命の復活への通路のような、与えられた生命に対する感謝へと変化させうる思考はあるだろうか？

Covid-19 は、グローバルな危機(パンデミック:世界的大流行)の名称である。それは、様々な切子面と出現を示しているが、疑いなく共通の現実である。我々は以前から長いこと予測されていたが、決して真剣に取り組まれてこなかったこの奇妙な状況が我々をさらに団結させたことを、決して以前のようにではなく理解するに至った。現代世界における多くのプロセスと同様、Covid-19 は、グローバル化の直近の現象である。純粋に経験的なパースペクティブから見ると、グローバル化は、多くの恩恵を人類にもたらした。科学的知識、医科学技術、および保健事業。それは、潜在的に全員の恩恵のために利用しうるすべてを普及させた。同時に、Covid-19 によって、不測の出来事(contingency) (cum-tangere [=contingence:接触])の共通の経験を共有することで、別の仕方で接続している我々自身を発見した。パンデミックは誰も見逃すことなく、我々全員を等しく傷つきやすい、等しく危険にさらされた者にした(cfr. 教皇庁生命アカデミー「グローバル・パンデミックと普遍的同胞愛」2020年3月30日*1)。

かかる自覚は高いコストで獲得された。どのような教訓を我々は学びとったのか？ さらに、人類家族に対して共通の責任をもって生きるために、我々は思考と行動をどのように転換させる準備をしたのか(教皇フランシスコ「人間のコミュニティ」2019年1月6日*2)？

1. 学びとった教訓の厳しい現実

パンデミックは、空っぽの通りとゴーストタウンのような都市、傷ついた身近な人々、物理的距離の光景を、我々にもたらした。それは、旺盛な抱擁、優しい握手、愛情のこもったキスを我々から奪い、人間関係を、見知らぬ者との間の恐ろしい相互作用の関係、防護具の匿名性に覆い隠された、顔のない個人のあいまいな交流に代えた。社会的接触の制限は、ぎょっとさせるようなものである。それは、孤立状態、絶望、怒り、そして虐待へと導きうる。生の最終段階にある高齢者にとっては、身体的苦痛に加えて、QOLの低下や家族や友人の訪問がなくなることで、苦痛はいっそう著しいものになる。

1.1 取られる生命、与えられる生命:脆弱性(fragility)の教訓

今、我々の通常の言語を侵食している支配的な隠喩は、敵意と充満する脅迫感を強調する。ウィルスとの「戦い」の激励、「戦時速報」のように聞こえるプレスリリース、感染者数の、間もなく「倒れた犠牲者」数に転じる、日々の更新。

あまりにも多くの苦痛と死において、我々は、脆弱性の教訓を学んだ。多くの国において、病院は、資源の消費制限の苦悩と、ヘルスケア・スタッフの疲労困憊に直面しつつ、なお圧倒的な需要と苦闘している。言葉にできない無数の悲嘆、生き残りの最低限の必要のための闘争は、囚人、社会の周縁で極度の貧困を生きている人々、とり

わけ発展途上国における、難民キャンプの地獄で忘却を運命づけられた見捨てられた人々の状態を暴露した。

我々は、最も悲劇的な死に直面した。身体的にも精神的にも、別離の孤独を体験している人。別れの挨拶も、相応の埋葬という基本的な敬虔を示すことさえできない家族を何もできないまま取り残す人。我々は、年齢、社会的地位、あるいは健康状態の区別なく、終わりを迎える生命を目撃した。

「脆弱性」。これが我々全員の状態である。それは、我々の存在の核心において、有限性の経験によって徹底的にしるしづけられたものである。それは、単に偶発的にそこにあるものではない。過ぎていく現在のやさしい接触によって我々に軽く触れるのではない。すべてが我々の計画に従って進行することを確認して、邪魔されずに計画を生きることをさせない。我々は神秘的な起源の夜から浮上する。いかなる選択も超える力を与えられると、我々が単に与えられたものを、我々のものとして主張しつつ、我々はすぐに慢心と不平に達する。我々がそこから来て、最後にそこに帰還する闇を受け入れることを自覚するのは、あまりにも遅い。

これはすべて不条理の物語だ、と言う者もある。なぜならそれは、すべて無に終わるからである。しかしかたして、この無が最後の言葉でありうるのか？ もしそうなら、なぜ戦うのか？ なぜ、このパンデミックにおいて我々が経験していることがすべて終わるときに、よりよい日々を期待することへお互いに励まし合うのか？

生命は到来して去る、とシニカルな分別 (prudence) の管理人は言う。しかし我々人間の状態の脆弱性によって、今やいつそう明らかになったその上昇と下降は、別の知恵 (wisdom)、別の自覚へと我々を開くかもしれない (cfr. 詩篇 8)。生命の脆弱性の悲惨な証明は、それが賜であるという我々の自覚も新たにすることができる。この度の不測の事態のアンビバレントな果実を味わった後に生命へと帰還することで、我々はより賢くなるのではないだろうか？ 我々はより傲慢でなく、より感謝に満ちるのではないだろうか？

1.2. 自律の不可能な夢と有限性の教訓

パンデミックによって、我々の自律的な自己決定とコントロールの要求は、間もなく厳しい打撃、すなわち、より深い識別を要求する危機の瞬間に立ち至った。それは、遅かれ早かれ、いつか起こらなければならなかった。その魔力はあまりに長く続いた。

Covid-19 の流行は、我々の地球の侵略と、その内在的価値の略奪と大いに関係する。それは、我々の地球の愁訴と我々の無能な取り扱いの徴候である。それはさらに、我々自身の精神的愁訴の徴候である (教皇フランシスコ回勅「ラウダート・シ」119)*3。我々は、自然界との不和を修復することができるだろうか？ 我々はあまりにも頻繁に、我々の独断的な主観性を、創造への脅威、他者への脅威に転換してきた。

次のような現象を関連づけるつながりの鎖を考えよ。増加する森林伐採は、野生動物を人の居住地の近くに追いやる。動物に寄生するウイルスは、次いで人に移り、かくして動物原生感染症の現実を悪化させる。科学者には多くの疾患の媒体として、よく知られた現象である。第一世界の国々における食肉の過度の需要は、動物農場や市場開発の巨大産業の複合体を生じさせる。これらの相互作用が、国際的な輸入、人の集団移動、ビジネス・トラベリング、ツーリズム等を通して、最終的にウイルス拡散の誘因となりうることは容易に理解できる。

Covid-19 の現象は、単なる自然の出来事ではない。自然において生じていることは、すでに経済的選択と発展モデルという人間の世界による複雑な媒介の結果であり、それ自体、我々自身の創造した別の「ウイルス」のまさに「感染」によるものである。それは、放縦で過度の消費によって定義される、財政的大食、ライフスタイルの放埒の原因というよりも結果である。我々は、我々自身のために、言い逃れのエトスを構築し、創造の根本的な約束において我々に与えられたものを無視してきた。これが、我々が、自然環境への我々の関係を再考するよう要求されている理由である。我々は支配者や君主としてではなく、地球に執事として居住することを承認する必要がある。

我々はすべてを与えられたが、我々のものは、単に与えられた、絶対的でない統治権 (sovereignty) である。その起源を自覚すると、それは有限性の重荷と傷つきやすさを刻印される。我々の状態は、負傷した自由である。我々はそれを呪い、すぐに克服される仮の状態として拒否するかもしれない。しかし我々は、別の忍耐を学びとることもできる。有限性への同意、近くの隣人と遠くの他者との相互作用を新たなものにする可能性。

貧しい国の苦境、特に南半球の国と比較するとき、「発展した」世界の苦境はより贅沢なもののように見える：富裕な国においてのみ、人々は安全を要求する余裕がありうる。それほど幸運でない国においては、他方、「物理的距離 (physical distancing)」は、最低限のニーズとすさまじい環境の重圧のゆえに、全く不可能である。群衆で混み合った周辺環境と、ふさわしい距離の欠如が、打ち勝ちがたい事実として、全人口集団の前に立ちはだかる。二つの状況のコントラストは、再び貧しい国と富裕な国の富の不釣り合いを物語りつつ、不協和音のようなパラドックスを際立たせる。

有限性を学ぶこと、そして我々自身の自由の限界に同意することは、哲学的リアリズムの穏健な行使以上のものである。それは、この肉における限界を超える人間の現実の前で、我々の目を開くことを必要とする。生存のための最小限の条件を保障するための、自分の子どもと家族を養うための、災害の脅威を克服するための、生き残りのための日々の挑戦において。他方では、入手するには余りに高価で維持できない医療が使用できるのに。南半球における計り知れない生命の喪失を考えよ。マラリア、結核、飲料水と基本的資源の欠如は、なお数千万の生命の破壊を毎年広める。これは、過去数十年にわたって知られてきた状況である。これらすべての苦境は、献身的な国際努力と政策によって克服することができるだろう。どれほど多くの生命が救済され、どれほど多くの疾患が根絶され、どれほど多くの苦しみを避けることができるだろう！

1.3. 相互依存のチャレンジと共通の傷つきやすさ (vulnerability) の教訓

モノ論的孤独への我々の要求は、粘土の足を持つ。それによって、グローバルな、そして単に国家的でないスケールにおける共通善の責任を受け付けない、ゆがんだ自己充足のイメージに歪曲された打算的な合理性の倫理学に向かうエゴイスティックな疑いの上に建設された、新しいモノ論的社会哲学への偽の希望は崩壊する。

我々の相互関連 (interconnectedness) は、事実の事象である。それは、相互関連に対する我々自身の態度によって、我々全員を強くするか、反対に傷つきやすくする。国家レベルでのその重要性をまず考えよ。Covid-19 は全員を襲う可能性があるが、それは、高齢者や、あるいは持病や免疫システムに損傷のある人のような、一定の人口集団にとって特に有害である。政治的施策は、すべての市民を平等に考慮する。それらの施策は、最も傷つきやすい人と、若く健康な人の連帯を必要とする。それらは、公的な相互作用と、彼らが生きるための経済活動に依存する多くの人の犠牲を要求する。より富裕な国においては、これらの犠牲は一時的に補償される。しかし大多数の国において、かかる保護政策は全く不可能である。

確かに、すべての国において、公衆衛生という共通善は、経済的利益とバランスをとる必要がある。パンデミックの初期段階の間、ほとんどの国は、最大限、生命を救うことに焦点を合わせた。病院と、特に集中治療サービスは不十分だった。そして、莫大な苦闘の後によりやく拡大された。ケアサービスは顕著に、テクノロジーな投資以上に、医師、看護師、そして他のケア専門職の印象的な犠牲のゆえに、生き残った。しかし病院のケアに焦点を合わせることは、他のケア制度から我々の注意をそらした。たとえば高齢者施設は深刻にパンデミックに襲われ、十分な防護具や検査は遅い段階になって初めて使用可能になった。資源配分の倫理的議論は、より高いリスクとより重い傷つきやすさを経験している人々に注意を払わずに、主として功利主義的考察に基づいていた。多くの国々において、一般的なケア従事者は、一多くの人にとって、彼らがケアシステムにおける最初の接触先であるのに— 無視された。結果は、Covid-19 以外を原因とする死者と障害者の増加だった。

共通の傷つきやすさは、国際協力も、そして、パンデミックはグローバル・レベルで、誰もがアクセスしうる、ふさわしい医療のインフラなしには抵抗しおおせないという認識も要求する。突然感染したある国民の窮状は、国際同意を締結せずに、隔離によって、また多数の様々なステークホルダーによって、対応することはできない。情報の共有、救助の提供、不足した資源の配置は、すべて努力のシナジー〔共同作用〕によって対処しなければならないテーマである。国際的な鎖の強さは、最も弱いリンクによって決定される。

教訓は、深い所で消化吸収される必要がある。もちろん、希望の種子は、世に知られない小さな功績の陰に隠れて、数えるには多すぎる、言い広めるには貴重すぎる連帯の行為によって確実に撒かれてきた。コミュニティは、全体に関わりなく、誇りをもって戦った。時に彼らの政治的リーダーシップの愚かさ反して、連帯と相互配慮の理想に基づく生を新たな仕方イメージしながら、倫理的プロトコルを起草し、規範的システムを考案するために。これらの実例に対する満場一致の感謝は、生命の真正な意味の深い理解と、その実現の望ましい様相を示すものである。

それでもなお、我々は、特にグローバルなレベルで、人間の相互依存と共通の脆弱性に対して十分な注意を払っていない。ウイルスは境界を認識しないのに、国は国境を封鎖する。他の災害とは対照的に、パンデミックは、すべての国を同時に襲わない。これは、他国の経験や政策から学ぶ機会を提供しえたのに、グローバル・レベルでの学習のプロセスは最小限だった。率直に言うと、いくつかの国は、時々相互非難というシニカルなゲームに専念した。

同じ相互関連の欠如は、治療薬とワクチンの開発の努力においても観察される。調整と協力の不在は、今やますます Covid-19 に対処するための障害として認識されている。我々は共にこの災害に直面しており、人間のコミュニティとしての協力的な努力を通してのみ我々はそれを克服しようという自覚が、共有された義務に命を与えている。境界を越えた科学プロジェクトの表明は、そのような方向に進む努力である。それは、国際機関の強化を

通して、政策においても明確に表明されるべきである。パンデミックはすでに存在する不平等と不正義を増強しており、Covid-19 に適切に対処する資源や構造を与えられていない多くの国が援助を受けるために国際的なコミュニティに依存している。この限りにおいて、国際機関の強化は特に重要である。

2. 新たなビジョンへ：生命の復活と回心への招き

脆弱性、有限性、そして傷つきやすさの教訓は、新たなビジョンの入口に我々を導く。知性の義務と、道徳的回心の勇気を要求する生命のエートスを促進する。教訓を習得することは、謙遜になることを意味する。それまでに開拓されていなかった、おそらくは否定されてきた感覚の資源を探索しながら変化することを意味する。教訓を習得することは、生命という善を、もう一度自覚するようになることを意味する。生命は、避けることのできない喪失経験よりも深い場所を流れるエネルギーを放つことで、我々に生命を与え、念入りに練り上げられ、我々の存在の意味に統合されなければならない。この機会は、人間のコミュニティの新たな始まりの約束、生命の復活の約束であることができるだろうか？ もしそうなら、どのような条件ですか？

2.1. リスクの倫理学へ

我々はまず、リスクの実存的現実の新たな考察に到達しなければならない。すなわち、我々は全員、疾患の打撃、戦争の殺傷、災害の圧倒的脅威に屈服する可能性がある。これに照らして、健康、生命、尊厳のより大きいリスクにさらされている個人や集団の傷つきやすさの前で、個別特殊な多くの倫理的および政治的責任が出現する。Covid-19 は、一見すると、グローバルなリスクの、単に**自然的な決定子**とみなされるかもしれない。もちろん前例はない。しかし、このパンデミックは、多次的な倫理的挑戦を包含するような多くの追加的ファクターの考察を我々に強いる。かかる脈絡において、決定は、予防措置の原則に従って、リスクに釣り合わなければならない。世界の国の間の経済的、社会的、政治的不平等を考慮せずに、パンデミックの自然的起源に焦点を合わせることは、その拡散をより早く、対処をより難しくしている状態の意味を把握しないことを意味する。災害は、その起源が何であれ、人間の生命を左右し、様々な次元で人間の存在を傷つける大惨事である限りにおいて、倫理的な挑戦課題である。

ワクチンの不在によって、我々は、疾患の病理学的強度の自発的消耗を除いて、パンデミックを引き起こしたウイルスを永続的に負かす能力を考えるとできない。Covid-19 に対する免疫は、それゆえ、将来の希望にとどまる。このことが意味するのは、コミュニティでリスクをもって生きることを承認することは、そのようなリスクが本当に現実になるかもしれないという見込みをもって、それと**パラレル**に倫理を要求するということである。

同時に、我々は、苦しんでいる者を助ける一般的な義務を超えて拡大する**連帯**のコンセプトを明確に記述する必要がある。パンデミックは我々全員を、抑圧的で不正義な我々のグローバルなコミュニティの構造的次元 — 宗教的意識が「罪の構造」と定義するもの — に取り組み、新たな形態に造り直すよう促す。**人間のコミュニティの共通善**は、心と精神の真の回心なしには達成されえない（「ラウダート・シ」217-221）。**回心**への要求は、我々の責任感に向けられる。その近視眼の原因は、このように明白なことを見る能力が我々にないからではなく、グローバルなレベルで最も弱い人口集団の傷つきやすさを見ることを我々が拒むことにある。我々が故意に見過ぎてきたものをついに包含することによって、別の開放が、我々の道徳的想像力の地平を拡大しうる。

2.2. グローバルな努力と国際協力への招き

連帯のより広いコンセプトに根差したリスクの倫理学の基本的輪郭は、あらゆる地域第一主義、すなわち内部者（コミュニティへの完全な所属を提示しうる者）と外部者（せいぜいそのコミュニティへの推定的参与を希望しうる者）の虚偽の区別を拒否する。かかる分離のダークサイドは、観念的不可能性と差別的実践として際立たせられなければならない。誰も、あたかも**人間のコミュニティ**の門で、完全な身分の承認をただ「待って」いる者とみなされることはできない。質の高いヘルスケアと必須医薬品へのアクセス権は、普遍的な人権とみなされなければならない（cfr. 「バイオエシックスと人権に関する世界宣言」第 14 条）。かかる前提から、二つの結論が論理的に導かれる。

第一は、予防、診断および治療の最善の機会への普遍的アクセスに関わる。それは少数者のみに予約されてはならない。ワクチンの分配は、もしそれが将来使用可能になった時は、その象徴的なケースである。ワクチンの公正な供給と矛盾しない、唯一受け入れることのできるゴールは、誰も排除せず、全員がアクセスしうることである。

第二の結論は、**責任ある科学研究**の定義である。ここでは危険性が非常に高く、問題は複雑である。三点が強調に値する。第一に、**科学の正確性** (integrity) とその進歩を促進する観念に関して。もし完全に「分離されて」いないなら、コントロールされた客観性という理想、および研究の自由の理想、特に利益衝突からの自由。第二に、危機にさらされているのは、平等、自由および衡平の規則によって、民主主義の文脈において決定された、社会的

プラクティスとしての科学的知識の性質それ自体である。かかる決定と政治の領域は、その全体において、科学の力の逸脱からの自らの自律を保持する。一特に科学の力が世論の操作に変容するときは、最後に、ここで問われているのは、その社会に有益な結果の追求における、本質的に「受託者的な (fiduciary)」科学知識の性格である。一特に、科学的知識が、人間に対する実験と、臨床試験で試された治療の約束を通して獲得される場合には、社会の善とヘルスケア領域における共通善の需要は、収益に対するいかなる関心よりも前に来る。研究の公的次元は、私的利益の祭壇に犠牲として供されることはできないからである。生命とコミュニティの福祉が危機にさらされているとき、収益は後部座席を占めなければならない。

連帯は、国際協力におけるどの努力にも広がる。この脈絡において、特権的な場所は、WHO に属する。グローバルなシナジーにおけるガバメントのコミットメントのみが最高の到達可能な健康のスタンダードへの普遍的権利を保護し、有効にすることができるという観念は、国際的なヘルス・ワークを導くための WHO のミッションに深く根差している。この危機は、前例のない大惨事に対抗する、特にあまり発展していない国のニーズや懸念を含めて、グローバルなアウトリーチを持つ国際機関がどれほど必要とされているかを際立たせる。

自国の利益という視野の狭さは、世界の残余から独立し、孤立する政策を自国のために擁護することへと多くの国を導いた。あたかも調整されたグローバルな戦略なしに、パンデミックに対抗しうるかのように。かかる態度は、補助性 (subsidiarity) というアイデア、およびローカルな状況から離れているより高い権威よりも、より低い権威を上席に据えることを要求する戦略的介入の重要性へのリップサービスかもしれない。補助性は、その能力と責任に公的権限を与えつつ、コミュニティの正当な自律の領域を尊重しなければならない。現実には、問題となっている態度は、分離のロジックに給水する。それは、まず何よりも、Covid-19 に対していっそう有効ではない。[地域第一主義の] 不利は、さらに、単に事実上、近視眼的であるのみではない。それは、不平等を広げ、諸国間での資源のアンバランスを悪化させる結果をも招く。富裕な者も貧しい者も、全員がウイルスに対して傷つきやすいのに、後者は最も高い対価を払い、協力の欠如の長期にわたる帰結に耐えることを余儀なくされている。パンデミックが、より多くの人々を傷つきやすくすることによって、また保健支援、雇用、社会的緩衝装置なしに周縁化することによって、すでに存在するグローバル化のプロセスに伴う不平等を悪化させることは明白である。

2.3. 連帯の原則を中心とした倫理的釣り合い

最後の分析において、人間家族が現実には直面している本当の問題は、道徳的な、単に戦略的でない、連帯の意味である。連帯は、それを必要としている他者への責任を含んでいる。それは、尊厳を付与された人の主体として、どの人格もそれ自体で目的であり手段ではない、という認識に根差している。連帯を社会倫理の原則として詳細に記述することは、現実には連帯を必要としている人の具体的な状況にかかっている。かくして、我々に要求される対応は、同情という感情的な観念に基づいた単なる反応ではない。どの人間もが持つ生来的な価値を合理的に憂慮することを前提とした倫理的配慮を払うこと、それが、他者の注意を要求する他者の尊厳に対する唯一の、ふさわしい対応である。

義務と同様、連帯は、コストなしに、そして富裕な国々が、貧しい人の生き残りや地球全体の持続可能性のために必要な価格を支払う準備なしに、無償では訪れない。これは、共時的にも一経済の様々なセクターに関して一、通時的にも一すなわち、未来世代の幸福と使用可能な資源の評価判断についての我々の責任に関して一、言えることである。

誰もが自らの役割を果たすよう要求される。危機の帰結を軽減するためには、あたかも助けはすべての責任ある市民を、個人の利益の追求には冷静な平衡状態の外に置くような超現実的な力 (deus ex machina) 力から来るかのように、「助けは政府から来るだろう」という観念を諦めることを、当然の前提とする。政策および政治的戦略の透明性は、民主的プロセスの統合性ととともに、これとは別のアプローチを要求する。医学的ケアのための破局的な資源不足の可能性 (Covid-19 の場合には、防護具、検査キット、人工呼吸器、集中ケア) は、その一例として用いられる。悲劇的ジレンマに直面しての介入の一般的基準が、資源の配分における公正、誰も尊厳の尊重、および傷つきやすい人への特別な配慮に基づいて、それらの可能な限りのケアによる合理的相応性において、事前に概略され明確に表明されなければならない。

相互に競合しうる諸々の原則の釣り合いをとる能力と意志は、リスクと連帯の倫理学のもう一つの本質的な柱である。もちろん、第一の義務は、生命と健康の保護である。ゼロ・リスクの状態は不可能なままであるが、身体的距離の尊重と、スローダウンは、もしあらゆる活動が完全に停止するのでなければ、一定の活動が経済の上にドラマティックで持続的な影響力を生む。私的および社会的な生活の代価も考慮されなければならないだろう。

二つの決定的に重要な問題が場所を占める。第一は、その実現が、権力と富の状態に差別的効果を生み出す可能性のない、受容しうるリスクの敷居に関連する。診断手段の基本的保護と利用可能性は、差別禁止の原則に従って、全員に供給されなければならない。

第二に、決定的な説明は、「リスクにおける連帯」のコンセプトに関わる。コミュニティによる、個別特殊的规则の採用は、当該領域の状況の展開に注意深くあることを要求する。それは、単に法律の文言への従属においてではなく、倫理的繊細さに基づく識別を通してのみ実行されうるタスクである。責任あるコミュニティは、警戒の重荷と相互の支援が、先行学習の影響下で、全員の幸福を展望するビジョンによって共有されるコミュニティである。故意の違法行為、あるいは懈怠に対する有責性と非難の配分の衝突を法的に解決することが、正義のツールとして必要な場合もある。しかし、それらは、人間の相互作用の実質としての信頼と交換することはできない。信頼のみが、危機の間、我々を導くだろう。信頼に基づいてのみ、人間のコミュニティは、最終的に繁栄することができからである。

我々は、二つの相反する誘惑の並行する影響を超える、希望の態度へと招かれている。一方では、受動的に出来事を耐えるところの放棄、他方では、以前のものにただ憧れる、過去に帰還するためのノスタルジー。しかし今はそうではなく、各人と全員にとってよりよい未来を可能にする人間の共存のプロジェクトをイメージし、実行する時である。アマゾン地域のために最近構想された夢、「それらが『善い生』を享受することを可能にする、そのあらゆる居住者〔生息動物〕を統合し、促進する」夢は、地球全体のための普遍的な夢になるかもしれない(Querida Amazonia, 8)*4。

(バチカン、2020年7月22日)

* 邦訳は英語版とイタリア語版から行った。〔 〕内および注は、記者による。(秋葉 悦子・訳)

*1 Pontifical Academy for Life, Global Pandemic and Universal Brotherhood: Note on the Covid-19 emergency, 2020.

*2 Letter of Pope Francisco to the President of the Pontifical Academy for Life for the 25th Anniversary of the Establishment of the Academia Humana Communitas, 2019.

*3 Francisco, Encyclical Letter Laudato si', 2015.

*4 Francisco, Post-Synodal Apostolic Exhortation Querida Amazonia, 2020.

日本基督教団「教団新報」(【4928.29号】2020年6月27日)

新型コロナウイルス感染拡大に伴う「緊急事態宣言」の渦中で

「神学者たちの声に聞く」

時代と他者に出会い直して行く教会

柳下 明子《日本聖書神学校教授／歴史神学》

新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、「不要不急」の外出の自粛要請が始まると、地域によっては主日礼拝を会堂で行わない、または教職のみで礼拝を献げる、ということが起こりました。

カトリック教会では感染拡大を防止するのは愛の業であるとの判断で、2月末には東京大司教区では信徒の「ミサの免除」が宣言され、公開のミサは中止となりました。日本聖公会でも教区によっては「公禱」の休止を決定しました。東京教区ではその決定の後、主教の司式する聖餐式の配信を教区が始めています。これらの教派においては各個教会の個別の礼拝の状況に関わらず、司教の献げるミサや、主教の献げる聖餐式を通して教会の公同性は保たれることとなります。ルター派の教会ではルターの著作から、主日礼拝は律法的に特定の場所や時間に拘束されるものではない、という共通理解を確認することで、家庭礼拝を意味づけることも可能でした。

「教会は主の日毎に礼拝を守り」と教憲に定め、各個教会主義に立つ日本基督教団では礼拝共同体の公同性はどのように保たれるのでしょうか。

「不要不急」の活動の自粛を要請される地域で礼拝をどうするのか、ということは当然のことながら教会の状況に応じて判断することになります。多くの教会が厳しい決断を迫られたことと思います。「もし、教会が集団感染を起こしたら」、「礼拝出席者をいのちの危険にさらすのか」、「『自粛要請』などという一切の拘束力を持たないものに従って主日の礼拝を休むのか」、「礼拝は『不要不急』なのか」。

これらの問いに正解が与えられていれば、どれだけ楽なことでしょう。会堂に於ける礼拝を休止した教会では、週報を基に会員が家庭礼拝を持つことを勧めたり、ウェブで礼拝を中継したりして、伝統的な文書伝道と新しいツールを用いた牧会を展開してきました。この経験は、今後感染症の拡大が落ち着いて各地で礼拝堂に人が集まる日々が戻ってきたとき、必ず教会を支えるものになるはずで、教会は自分たちが何を大切にしているかを明確に自覚して、様々なツールをもって宣教に向かうものになったからです。

日本聖書神学校でも前期の授業は遠隔で開始しましたが、学生が「同じ教室で共にいるということに聖霊が働いていることがわかった」という感想をもらいました。不便や喪失の中で、本質的なものを発見することがあります。そして学生たちには、「各個教会主義の教会に仕える牧師は、とにかくよく学び、遣わされた教会の状況をよく見て、柔軟に対応することが必要」ということを伝えました。先人の神学者たちの言葉に学び、他教派の実践と対話することは、各個教会主義の教会が不安の中で立って行くときの支えです。

分断と経済的破綻が一層深まったこれからの世界には、教会の果たすべき役割はますます大きいです。対話に対して、社会に向けて「開かれている」ことが教会に一層求められます。共に時代と他者に会い直して行きましょう。

コロナ後の「新しい日曜」

関谷 直人《同志社大学神学部教授／実践神学》

私が協力牧師として関わっている教会は、もともと自前の礼拝堂を持たず、幼稚園の園舎を借りて毎週の礼拝をしてきた。だから新型コロナウイルスによる幼稚園の通園停止に伴って、必然的にこの教会は礼拝する場を持たなくなったのである。

そこでこの教会では、副牧師がビデオカメラとPCの動画編集ソフトを駆使して作成した「礼拝動画」をYouTubeにアップロードし、毎週日曜日の朝に信徒がそれを視聴できるようにしてきた。

悪いことばかりではない。聴覚が弱ってきた高齢者の信徒からは、「音声は礼拝のときよりもはっきり聴こえる」との声があり、自発的に「最近の動向」として写真や近の動向として写真や短信をメールで送ってくる信徒も現れた。それらを紹介した次の週の動画の「報告」は、信徒同士の交わりを維持する上で大切なやり取りの一つとなっている。

顔と顔を合わせてでなければ礼拝とは言えないという思いはわかる。しかし、今回の「新型コロナ」下においては、礼拝堂での対面式の礼拝の中断を決定した教会は「苦渋の決断」（決して「苦肉の策」ではない）として、オンラインによる礼拝映像・音声の配信や説教原稿の配布を行なってきた。そのような礼拝の形を、単なる緊急避難時の「礼拝の代替措置」で片付けてしまうのはあまりにもったいないではないか。むしろ、ここで得たものを今後の礼拝や交わりのバリエーションの一つとして捉え、深めることが大切ではないかと思うのである。

私たちの教会には、特に「コロナ」に関わらず、礼拝に来ることが困難となった高齢者が大勢いるはずである。障がいがあったり、仕事や家庭の事情でなかなか礼拝に来ることのできない信徒や求道者も少なくないだろう。もし、顔と顔を合わせて礼拝することだけが真の礼拝であり、その場に身を置くものだけが礼拝に参加しているのだとするなら、様々な事情で対面式の礼拝に参加できないこれらの人々を、共同体において区別し、そこに見えない「垣根」を作ってしまうのではないか。

コロナ後の「新しい日曜」を考えてみたい。対面式の礼拝に、今回の経験で培ったスキルを生かして（ハイテク・ローテクは問わず）様々な「礼拝」のバリエーションを（毎週とはいかないとしても）加えていく。そうすれば、日頃礼拝に出ることが困難な人々が「垣根」なく、そこに参与することができるようになるのではないだろうか。もちろん、そのために牧師個人に「過度な負担」が生じないように、信徒と牧師が知恵を出し合う必要があるだろう。この「コロナ」の苦しみを一過性の「苦難」としてではなく、「universal」で「inclusive」な礼拝を考える契機としたい。



教会は「恵みにより召されたる者の集い」、即ち、神の招きによって集められ、信仰と洗礼によってキリストに結ばれた者の群れである。その群れは、「公の礼拝を守り」というように、全ての人に開かれた礼拝を守り、そこで福音が正しく宣べ伝えられ、聖礼典が執り行われる。それは、神が招かれ、信仰へと導かれる方を、いつでも受け入れる用意があるということでもある。

日本の教会は、(国教会体制ではなく)自由教会として、この地に福音を宣べ伝えたい、また、ここに教会が必要であるとの、信仰による自発的な思いによって建てられてきた教会であり、神の招きと導きの下、一つの信仰の内に、自発的に礼拝しようと集まる者の群れであることを大切にす伝統を持つ。そのことに鑑みれば、今回の新型コロナウイルスの問題への対処も、自肅要請の有無によるのではなく、専門家の説明やガイドライン等を参考にしつつ、自発的に判断する必要があるだろう。

逆に言えば、今回、都道府県知事による自肅要請から教会は明示的に除外されたが、それは何の対策もしなくてよいことを意味せず、私たちが自ら考え判断しなければなるまい。その中で、どうしても感染のリスク、また感染させるリスク等を回避できないと、会堂に集まることを避けて自宅で礼拝する、あるいは会堂で行われている礼拝の中継を視てそこに心を合わせるという判断を個人がすることもあり得るであろう。

教会が、神の招きと導きによって、共に礼拝しようと自発的に集まる者の群れであるならば、本来、そこに来られる方がある限り、礼拝は守られ続けることになる。まずは、個人に与えられた礼拝への思いを最大限に尊重し、礼拝が感染拡大の場とならないためにどのような対策を取ることができるか、群れとして、礼拝を守るための出来る限りの検討をしたい。その上で、なおどの程度の公衆衛生上のリスクがあるのかを踏まえ、群れとしての判断も必要となる。

その中で、看過できない危険があるとして、やむを得ず、会堂に集まったの礼拝を限定あるいは休止するとしても、本来教会が礼拝に集められた「群れ」であることをどのように共に意識することができるのか、そして、このような不安な時であるからこそ神に心を向けようという方が興された時に、その方々をどのように群れに受け入れるのか、十分に考えておく必要がある。

このような時であるからこそ、「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」とあるように、私たちは御言葉に聞き、主が確かにおられることを信ずべきであるし、そのための信仰生活が貧しいものになってしまわないように注意したい。そして、ここに確かなものがあることをどのように指し示すことができるのか、祈りを合わせたい。

日本福音同盟 (JEA) 神学委員会 (2020 年 5 月)

「心をひとつにして、福音の信仰のために」
～新型コロナウイルス時代を生きる教会～

目 次

1. 「我、教会を信ず」	篠原 基章
2. 「いっしょに」集まる幸い ～愛と善行を励まし合うことにこそ～	赤坂 泉
3. 聖書(特に旧約聖書)における律法の柔軟な運用	千代崎 備道
4. インターネットを用いて「礼拝する」とは	山田 泉
5. 遠隔礼拝における聖餐	青木 義紀
6. 感染症とキリスト教会の歴史から	吉川 直美
7. AI 技術の成熟と教会を考える ～ 30 年後を見据えて	能城 一郎
8. コロナ禍におけるみことばの励まし	宮崎 聖輝



新型コロナウイルス感染拡大により日本ばかりでなく、世界中の教会がパンデミックの大きな影響の下に置かれています。特に4月6日緊急事態宣言が出された後、私たちは、これまで毎週さげしていた教会での礼拝の休止を余儀なくされ、さまざまな集会や活動が制限されてきました。JEA加盟の教団でもさまざまな対応がとられ、地域教会に判断を委ねながらも、教団としての対応を行っています。通常の礼拝に代わってオンラインで礼拝配信や説教の配信をはじめ、Zoom、YouTube、Facebookなどを使った新しい形の礼拝も一気に広がりました。

その後5月25日に緊急事態宣言は解除されましたが、感染の第二波、第三波を防ぐために「新しい日常」が始まりました。今後、教会もこの「新しい日常」の中でその働きを進めていくこととなります。このような大きな変化の中にある私たちは、現実的にさまざまな問いに直面しています。それらの問いは、私たちの信仰に本質的な課題を突き付けています。たとえば、教会に兄弟姉妹が集うことの意味とは何か、そもそも礼拝とは何か、キリスト者の交わりとは何か、オンライン上の礼拝はこれからも続けるべきなのか、聖餐式はオンラインで可能なのか、これまでの教会は疫病にどのように取り組んだのか、これからの教会は5GをはじめとするAI技術をどのように取り入れ、新たな教会の在り方、宣教の可能性に取り組めるか、などです。このような問いに私たちは向き合いながら「新しい日常」の中に置かれています。

日本福音同盟・神学委員会では、理事会の要請を受けて、これらの問いに対する神学的な考察を行いました。それぞれの先生方が神学校での教鞭をとり、地域教会の牧会に携わる忙しいスケジュールの中、1ヶ月という短い期間でペーパーを書き上げていただきました。しかもできるだけ読みやすく、信徒の方々にも考えていただきたいという願いから、A4で1頁という制限を設けて取り組んでいただきました。

これらの神学エッセイは、私たちに投げかけられている問いに対して、何か聖書的、神学的回答を導き出すものではありません。神学委員のそれぞれの先生方が、現場の地域教会と神学校で奉仕をしながら、同僚の先生方とともに苦しみ、悩みながら、いま考えておられることをまとめてくださったものです。それは、これらの課題についてこの文章を読む方々と一緒に考えるため、このような時代に置かれている私たちが、互いに励まし合い、心を一つにして、福音の信仰のために、力を合わせて戦いたいという願いから書かれています。そのような神学委員の思いを汲みながら、お読みいただけると幸いです。

日本福音同盟・総主事 岩上敬人

「我、教会を信ず」

福音伝道教団／東京基督教大学准教授 篠原 基章

「百年に一度の危機」とされる新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的な拡大は、私たちの日常を大きく変える程の影響を及ぼしています。教会も少なからず変化を余儀なくされています。多くの教会は教会堂に集まることを一時的に止め、オンライン礼拝に切り替えるなど様々な対応を迫られています。しかしながら、教会堂が閉ざされたとしても、教会は決して閉ざされることはないのです。別言すれば、どのような状況下にあっても、教会が存在することを止めることはないのです。

私たちは教会というと、屋根の上に十字架のついた建物を思いおこすかもしれません。しかし、それは教会堂であって、それ自体が教会ではありません。教会は「キリストのからだ」（エペソ1章23節）であり、教会のかしらであるイエス・キリストにあって集められた群れそのもののことです。それゆえ、教会は私たちが行く場所ではなく、私たち自身が教会そのものであることを思い起こしたいのです。私たちひとりひとりが教会の生きた部分であり、霊の家を構成する「生ける石」であるのです（Iペテロ2章5節）。

感染予防の一環として、「ソーシャル・ディスタンス」（社会的距離の確保）が重要だとされていますが、世界保健機構（WHO）はこれを「フィジカル・ディスタンス」（物理的距離の確保）と言い換えています。「社会的距離」という表現には、人と人のつながりという最も人間らしい社会的側面を断つというニュアンスが含まれてしまうことを危惧してのことです。教会は互いに物理的距離を確保する必要に迫られていますが、これが「スピリチュアル・ディスタンス」を生んではいけません。物理的距離が強調される今だからこそ、私たちがキリストにあって一つのからだとされているという霊的現実を思い起こしたいのです。キリスト者は互いに離れていたとしても、互いを自分の一部として感じ、祈りに覚えることを通し、互いに仕え合うことができるのです。

エペソ書は、教会はキリストのからだであり、「すべてのものをすべてのもので満たす方が満ちておられる

ところ」(エペソ 1 章 23 節)だと教えています。コロナ禍にあって、教会の活動は様々に制限され、自粛を余儀なくされているように見えます。一見、教会の働きは停滞しているように思われます。しかし、教会に与えられている生命はひとりひとりのキリスト者によって、確かに今もなお社会全体に差し出されているのです。私たちの生活の場、働き場のところが教会の最前線であることを覚えたいと思います。信徒はキリストの祭司性に与っており、それぞれの場において、それぞれの職業に従って、この世の真只中で神に霊的な犠牲を捧げ、そのことによってキリストのからだなる教会を建て上げるのです(1 ペテロ 2 章 5 節)。教職者は聖徒たちをこの奉仕の働きのために整える召しをこの時も受けています(エペソ書 4 章 12 節)。

私たちは公同の教会を信じています。公同とは普遍的であるということです。すなわち、私たちは時間と空間を超えた一つの普遍的な教会を信じています。しかし、それと同時に教会は特定の歴史的且つ文化的な存在です。キリストは私たちの歴史の中に受肉されました。そして、教会もまた歴史の中に受肉するようにと召されています。キリスト教の歴史は特定の時代、特定の文化に生きた教会の歴史だともいえます。今、教会のバトンは私たちの手に託されています。危機は強さと弱さをあらわにします。ポスト・コロナ時代を見据えつつ、神のこばに固く立ち、変えてはいけぬものと変えてもよいものを見分ける洞察力が与えられるように祈り求めたいと思います。

百年に一度の危機にあって、教会は教会であることをやめることはありません。それは、教会のかしらなるキリストが世の初めから終わりまで、ご自身の教会を集め、守り、保たれるからです。教会は、聖霊の力によって、この困難な時代にあっても希望に満たされ、信仰によって得られるあらゆる喜びと平和を証し続けるのです。「神のこばとイエスのあかしとのゆえに」(黙示録 1 章 9 節)。

「いっしょに」集まる幸い ～愛と善行を励まし合うことこそ～

聖書宣教会／聖書神学舎 赤坂 泉

予想を超える事態に直面して浮き足立ったのは、個人や行政ばかりでなく、教会も、と言えるでしょう。主日礼拝の整え方から教会活動の隅々まで、多くの判断を迫られました。神の民の優先順位と市民的な責任の引き受け方の両立とは、緊急事態宣言と自粛要請の中でなす教会の主体的な選択は、と神を愛し、隣人を愛する具体的なあり方を祈り求める日々が続きます。

ヘブル 10:25 の「ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い(新改訳第三版)」という訳文は、教会の議論をあるいは助け、あるいは緊迫させたようです。改めて「いっしょに」集まることを考えましょう。新改訳 2017 は「ある人たちの習慣に倣って自分たちの集まりをやめたりせず、むしろ励まし合ひましょう」と訳しました。細かな議論は描いても、「いっしょに」ではなく「集まり」に注目すべきことは明らかです。「励まし合い」を見落としてはなりません。また少し視野を広げて、19 節からの段落にある三つの勧告に留意しましょう。信仰をもって神に近づこう。希望を告白しよう。そして「愛と善行を促すために、互いに注意を払おうではありませんか(24)」です。25 節の、集まりを止めないで、励まし合うようにという勧めはこの第三の勧告に従属しています。つまり、いっしょに、どのように集まるかがこの箇所を中心的な関心ではありません。神に近づくこと、希望の告白に生きること、とりわけ愛と善行を促し合うことを勧告しており、そのために集まり、励まし合おうというのです。しかも、3:13 に「日々互いに励まし合って」とあったように、主日の礼拝や特定の集会だけのことではなく、日々のことです。

確かに教会は「一つになって」あるいは「同じ場所に」(使徒 1:15, 2:1, 44, 47)集まりました。しかし、困難や迫害によって散らされると「みことばの福音を伝えながら巡り歩いた」(cf.使徒 4:29, 31, 6:7, 8:4, 12:24...) のでした。パウロの宣教の足跡からも、一つの場所に集まった教会、家々に集まった教会、少人数の集会など多様なあり方が窺われます。

こうしてみると、どのように集まるかは副次的なことです。形態ではなく、集まる目的に焦点を合わせましょう。この事態にあって、愛と善行を促すために互いに注意を払うこと、そのために集まり、そのように励まし合うことが大切です。

こんにち、私たちには多様な手段が備えられていることを神に感謝します。一堂に会することは幸いです。顔と顔を合わせ、手と手を合わせるなかでいただく励ましがあります。同時に、インターネット等を介して「集まる」ことも幸いです。礼拝や祈禱会への「出席」がむしろ増えているという事例も聞きます。未信の家族が礼拝に連なり、多忙を理由に諦めていた教会員が次々に祈禱会に連なる。このときならではの幸いも数えま

しょう。集まること自体ではなく、愛と善行を励まし合うこと、神を愛し、隣人を愛する日々の現実を励まし合うことが目的であるなら、それを実現する手段はもっとありそうです。

ヘブル書の「ある人たちがなぜ集まりを止めるようになったのか確かな情報はありませんが、(例えばローマ帝国による迫害のような) 予期せぬ困難に直面して、という説は有力です。キリスト者を、信仰と希望、愛と善行から遠ざけようとする力に屈したのでしょうか。私たちは困難に屈するのではなく「むしろ励まし合ひましょう。」巷間には「自粛警察」のような愚かさばかりでなく、寄付やボランティアのような愛と善行の具体的な兆しも見られます。キリストの民こそ率先して地の塩、世の光として働きたいと思います。

そして「コロナ後の世界」を展望しましょう。社会生活も経済も、政治も国際情勢も、あらゆる面で激変を見るのでしょうか。直面するのが何であっても、信仰をもって神に近づき、希望を告白し、そして「愛と善行を促すために、互いに注意を払おうではありませんか。」そのために教会の「集まり」がいよいよ用いられますように。

聖書（特に旧約聖書）における律法の柔軟な運用

日本ホーリネス教団／東京聖書学院 千代崎 備道

コロナウイルスの感染拡大のために、多くの教会では教会堂に集まって礼拝を捧げることができないでいます。私たちは信仰の先達から「安息日厳守」と教わってきましたし、また集まって礼拝をすることの大切さを講壇から教えてきました。ところが教会堂に集まることを「禁止」せざるをえないことで牧師も悩み、また信徒の中にも教会堂に行けないことで罪意識を感じてしまう人もいるかもしれません。確かに「安息日を聖とせよ」と教えているのは聖書であり、私たちは聖書を正典(信仰と生活の基準)としているのですが、その聖書が時には定められた規定に例外を設けたり、代替案を提示していることも私たちは知ることができます。

・過ぎ越しの延期(民数記 9: 6~11)

過ぎ越しの生け贄を捧げるのは第一月の14日だが、死体に触れて身を汚した人はそれができなかった。その人々は汚れの期間が終わって、第二月の14日に一月遅れの生け贄を捧げて過ぎ越しを守ることが許された。

・捧げ物の代替(申命記 14: 22~26)

収穫の十分の一を「主の御名を置くために選ぶ場所」(後に神殿となる)に必ず携えて行って神の前で、家族とするのだが、道のりが遠すぎる場合は金に換えて運び、主の選ぶ場所に行ってからその金で好きなものを買って、それを家族とともに食して喜ぶことが許されている。

・安息日の例外(ヨシュア記 6: 3~4)

エリコ攻略には七日間の行動が命じられた。曜日は明記されていないが、そのうちの一日は安息日であるにも関わらず他の日と同様の行動が命じられた。これはエリコ攻略そのものが神に捧げる宗教的儀式と見なされたためと考えることも出来るが、神自らが命じられた場合は、安息日にも行動することは間違いではない。

・祭りの日程の地域による相違(エステル記 9: 16~22)

ユダヤ人を殺そうとする敵を除いて安息を得たことを記念して、プリムの祭りが制定されたとき、地方とシュシャンの都では戦いに日数が異なるために、祭りの日程にも違いがあった。すなわち地方では、アダル月の14日が祝宴の日であるが、シュシャンの都では14日と15日の二日間を祝宴の日とした。プリム祭はモーセ律法には無い祭りのため、強い規定ではなかったのかもしれない。

・礼拝の場所〈聖所〉の例外(エゼキエル書 11: 15~16)

バビロン捕囚となった人々は神殿での礼拝が行えなかったが、彼らが行ったその国々で、神ご自身が聖所となると約束された。これにより捕囚の民は各地に会堂を建てて安息日の礼拝を行い、その礼拝形式がやがてキリスト教の礼拝スタイルの元となっていく。なお、この約束は「しばらくの間」との条件付きで、その期間がエルサレム神殿破壊から神殿再建までのおよそ七十年かは明示されていないとしても、永久的な措置とは言えないだろう。

以上のように、律法の規定は状況によっては例外や柔軟な運用が許されることもありました。それは人間の側のやむを得ない状況を神が配慮しておられることの現れと思われれます。このような律法における神の御心があるからこそ、キリストの弟子たちが安息日の規定を破っていると非難するパリサイ人たちに安息日につ

いて教え「安息日の主」だと宣言され（マタイ 12：1～12）、安息日は人間のために設けられたと宣言をされた（マルコ 2：23～28）のです。

安息日（私たちににとっては日曜日と考えて）に定められた場所（旧約時代は聖所や神殿、新約時代以降は家の教会や教会堂）で礼拝を捧げることを、パライサイ的に守らなければならないとするなら、私たちが集まっての礼拝を行わないことは問題となります。しかし、このような状況において、もし神が私たちの出来ることを嘉してくださるのでしたら、新しい方法があり得ると考え、その中で最善を尽くすことは、聖書的に間違いとは言えません。緊急事態の後には教会堂に集まっての礼拝スタイルが再開されることを否定する必要はありませんが、新しいスタイルを柔軟に考えることは宣教の機会を広げるきっかけとなるかも知れないことを感じています。

インターネットを用いて「礼拝する」とは

ウェスレアン・ホーリネス教団／ウェスレアン・ホーリネス神学院 山田 泉

「全地よ、主に向かつて喜びの叫びをあげよ。喜び祝い、主に仕え／喜び、歌って御前に進み出よ。知れ、主こそ神であると。主はわたしたちを造られた。わたしたちは主のもの、その民／主に養われる羊の群れ。」

詩篇 100 編 1～3 節（新共同訳）

新型コロナの感染者数が東京で目に見えて増加した 3 月、その少し前から礼拝出席を控える方が起こり始め、それに伴い、多くの教会でインターネットによる礼拝のライブ配信が始まりました。その後、緊急非常事態宣言の発表がなされてからは、インターネットを用いての礼拝はある意味必然なこととなりました。教会に集まれないという特殊なケースでインターネット配信での礼拝が主となる時、通常と全く同じ形で構わないのか、ということを考えさせられます。多くの場合家庭で、しかもクリスチャンは一人だけという中での周囲への遠慮、これがきっかけで教会に行ったことのない家族が一緒に視聴してくれた場合、すなわち新来会者へのような配慮、いつも教会に出かけて礼拝をささげていた方の、礼拝への心備えに対して、何らかの考慮をしなくていいのかと思ひ巡らします。

実際教会は人々が礼拝に心を向けて集中しやすいように、神に出会い深い交わりに入れるようにと、伝統的に牧会的に配慮が尽くされています。たとえば教会での礼拝への導きについて挙げることができるでしょう。

(1) 礼拝順序

多く教会では週報の「礼拝順序」に従って礼拝が進められます。この順序は教派によって異なりませんが、いずれにあってもその礼拝順序は単に項目の羅列ではなく有機的に構成されています。レイモンド・アパ『礼拝』（日本基督教団出版）によると、「礼拝の基本的構造」として<交互運動と上昇運動>には、礼拝の順序には神から人へ、人から神への対話はキャッチボールのように交互運動があり、振子運動の図が描かれます。これに上昇原理が加わり、礼拝の進行と共に引き上げられ、らせん階段の図が描かれる。日曜日礼拝に向かう私たちは、社会での重荷や信仰の弱さの負目をひきずりながらもかもしれないが、礼拝に身を置く時、神は私たちを養い、引き上げ、新しい力に満たして遣わしてください。

(2) 五感を用いて（教会は人の五感に働き、その心を神に向けるように助ける）、たとえば、

視覚：教会の建物、整えられた玄関・受付、礼拝堂の趣、講壇の立派な聖書、生花、典礼色など

聴覚：奏楽のオルガンはその日の礼拝の内容を示し、賛美歌、聖書朗読、メッセージ、祈り、など

触覚：記名帳、週報ボックス、聖書、賛美歌、いつもの椅子、聖餐式のパンと盃、など

味覚：聖餐式のパンとぶどう液、お茶や食事、など

嗅覚：プロテスタントには殆どないですが「お香」がその日の意味を知らせる、教会の空気、など

そして何より愛兄弟との交わり、教会の先生からの声かけや握手など、生きた命の交わりが教会の礼拝にはあります。インターネット等に託する礼拝は可能性を多く含みつつ、届けられないものも多くあります。試みの一例として

- ・時間短縮：賛美を 1 曲・交読分を省略、メッセージを通常より少し短くする。
- ・機材の補充：従来の音響設備では聞きづらい、フリーズするなど、物理的に届かないことがある。
- ・情報：聖日前後の資料等の送付

・そして何よりも聖霊の臨在、聖霊の働きを強く祈ること。実際に距離があり、同じ空気を吸うことができない状況で、時空を超えて臨在して下さる聖霊による一致を、今までに増して祈る。

聖霊の働きにより、家庭にて一人で礼拝をするのであっても、「主の祈り」で教えられたように「我ら(わたしたち)」と祈ることを体験し、「昔いまし、今いまし、永遠にいます主をたたえる」礼拝に共にあずからせていただけることを思います。

今後、このような事態ではなくても、それぞれの生活に応じてインターネットによる礼拝が用いられることが考えられます。祈りつつ、模索しつつ進んでまいりたいと願います。

遠隔礼拝における聖餐

日本同盟基督教団／東京基督教大学講師 青木 義紀

はじめに

今般の新型コロナの影響で、多くの教会がインターネット等を利用した遠隔礼拝を行っています。そのような遠隔礼拝の中で、聖餐を行うことの是非が問われています。そもそも聖餐には、キリストにある信仰者の一致が表されていますが、皮肉なことにプロテスタント教会では、その最初期からこの教理をめぐって一致を見出せなかったという残念な歴史があります。今回の課題をめぐっても、おそらく賛否両論様々な意見があり、一致を見ることは難しいだろうと思います。それぞれの立場を尊重しつつ、福音派諸教会と、そこに生きる牧師と信徒の皆さんにとって、改めて聖餐の本質を問う契機となり、それぞれの神学的確信に立って聖餐がふさわしく執り行われることを願うものです。

1. 聖餐において大切なこと

聖餐において大切なことは、①主の御言葉、②主の指定した物質（パンとぶどう液）、③主の意向の三つです。第一に、主の聖餐制定の御言葉がきちんと読まれることです（マタイ 26:26-29, マルコ 14:22-25, ルカ 22:14-20, I コリント 11:23 以下など）。第二に、主が指定された物質であるパンとぶどう液が使われることです。パンでないものや、ぶどうの実で作った液体でないものが使われないということです。第三に、主が聖餐を制定された意向を踏まえてこれが執行され、会衆もまた主の意向を踏まえてこれにあずかることです。要するに、主が語られた通りに、主が指定された物質を使って、主の望まれる聖餐が行われることです。それに先立って、私たちの思いや都合が優先されてはならないのです。

2. 一つの体にあずかること

聖餐において重要なことは、一つのパンと一つの杯から分けられたものに、それぞれがあずかるということです（I コリント 10:16-17）。遠隔礼拝で聖餐が行われる場合、各自がそれぞれにパンとぶどう液を用意するのではなく、教会で分餐したものを届けてもらう方が良いでしょう。もしそれが困難であれば、メーカーや商品を指定して、せめて同じ味のパンとぶどう液にあずかるようにしたら良いのではないかと考えています。

3. 聖別の課題

聖書には、イエスが「パンを取って」から神をほめたたえてこれを裂いたと書かれています（マタイ 26:26）。「杯を取って」から感謝の祈りをささげたとされています（マタイ 26:27）。聖別において重要なことは、聖別の対象を明確にすることです。その点で、遠隔礼拝における聖餐では、この点が曖昧になる可能性があるので注意が必要です。信徒が、聖別されていないパンとぶどう液にあずかることがないように、執行者は十分に気を付けなければなりません。

4. 「ふさわしい者」の吟味

聖餐において重要なことは、聖餐にあずかるべき者があずかり、そうでない者があずかることのないようにすることです。これは、主のさばきを身に招くことのないよう、会衆を守るためにも重要なことです。このために司式者は、相当の神経を使います。しかし遠隔礼拝における聖餐では、この点で執行者から会衆が十分に見えないという難しさがあります。かなりの部分を会衆にゆだねることになります。会衆の主観に任せるだけでなく、より客観的な吟味のために、この点をどう克服し、聖餐をふさわしく執行するかは、今後の大きな課題だと思います。

おすびにかえて

私自身は、しばらくの緊急事態の期間は、聖餐を控える方が賢明だと考えています。教会も個人も、通常の生活が確保できない非常事態の中で、不用意に聖餐を行って、思わぬ失敗を犯したり、主の御心を損なっ

たりすることを何より危惧するからです。しかしこれが長期化し、一年も聖餐にあずかれないという事態が生じることは避けるべきだと思っています。むしろ、御言葉の約束をますます確信させる聖餐が、ふさわしく行なわれることによって信仰者が希望を見出し、福音の約束に立ってこの困難を乗り越えていくことを何よりも願うものです。

感染症とキリスト教会の歴史から

シオンの群教会／聖契神学校 吉川直美

キリスト教会は、その始まりから「ローマ帝国が不治の疫病によって荒廃されなかったなら、キリスト教が世界勢力としての基礎を固めることにたぶん成功しなかったであろう。」(F. F. カートライト『歴史を変えた病』倉俣トーマス旭／小林武夫訳、法政大学出版会)と評されるほど、感染症と深い関わりを持ってきました。その一部を概観して、今を生きる私たちへのメッセージを聴き取りたいと思います。

■キュプリアヌスの疫病

ローマ帝国は2世紀から6世紀にかけて、度重なる疫病に舐め尽くされてきました。とくに3世紀にローマを打った「キュプリアヌスの疫病」において、既存の諸制度が為す術もなく、隔離の名の下に感染者を遺棄して信用を失墜する一方、キリスト教会は、見捨てられた病者を主イエスに倣って看護し、貧しい者や異教徒の遺体も分け隔てなく埋葬することで、死亡率を押し下げて異教徒の信頼を得ていきます。彼らの心を捉えたのは、献身的な看護や兄弟愛のみならず、その源にあるキリスト教の死生観、終末観でした。神は正しく生きた者に永遠のいのちを与えるという教えは、死と隣り合わせの人生を意義あるものとし、貧しい者にも生きる希望を与えたのです。看護のためにいのちを落とした者は殉教者として榮譽を受け、福祉や医療行為は教会の働きとして発展していきます。こうして、福音の証しとともに教会の社会における役割が方向付けられていったのでした。

■鞭打ち苦行者とユダヤ人迫害

中世ヨーロッパを苦しめたペストは、大別すると三つの反応を引き起こしました。第一に、ボッカチオの『デカメロン』に見られるような刹那的・享乐的な生活態度です。第二に、疫病を神からの罰と受けとめて、その怒りを回避しようとする購罪行為としての「鞭打ち苦行運動」が挙げられます。自分自身で、あるいは互いに鞭で打ち叩いて行進するという異様な光景でしたが、当初は集団懺悔として教会にも歓迎され、聖職者と信徒の区別なくヨーロッパ全体で何千何万人が熱狂しました。やがて、富裕層や形骸化した教会に対する革命の様相を帯びるに至って、教会の激しい弾圧に遭い自壊の道を辿りますが、彼らの熱は中世の終焉を推し進め、宗教改革への布石となりました。第三に、鞭打ち苦行者たちの贖罪行為は、神の怒りを宥めるための犯人探しに転じ、ユダヤ人、障がい者、富裕層などが標的とされました。関東大震災において朝鮮人に着せられた濡れ衣と同じく、ユダヤ人が井戸に毒を投じたという噂がまことしやかに流れ、強制改宗させられた末に焼き払われています。彼らは東へと逃げますが迫害の連鎖は止むことなく、ホロコーストへのレールが敷かれていったのです。

一方、私たちと同様に外出自粛を余儀なくされた人々が、「強制された安息日」として肯定的な意味づけをしていたという記録に励まされます。前述のような狂騒の中で、神との関係を深めた人たちもいたのです。

■COVID-19 下の教会

このように、感染症と教会の歴史には光と影があります。3世紀のクリスチャンがいのちを賭して証した福音、主イエスの十字架の愛と復活の希望は、今に至るまで消えることなく貫かれている光です。被災地で「キリストさん」と信頼され慕われる姿に、終油を塗るために感染しいのちを落とした司祭たちの中に、葬儀で語られる復活の希望のことばに、福音の光は引き継がれています。

一方、人には恐れや不安から原因探しをして、異民族や弱い者、異なる価値観を持つ者に罪を着せようとする、そのような闇があることも心しておかなければなりません。ますます強者の論理が幅をきかせる世界で、教会は神の国の民として、COVID-19 下ゆえに与えられた福音宣教の可能性を励まし合っていこうではありませんか。

「隔離」「検疫」を意味する英語“quarantine”は、イタリア語の40が語源で、かつて、港に着いた船の乗船者が、上陸するまで40日間隔離されたことに由来します。聖書における40日が、新しいフェーズを迎えるまでの神から与えられた準備期間であることと重ねあわせるなら、COVID-19 下における期間(年

単位になるかもしれませんが)が教会にとって強制された安息日となり、朽ちることのない福音の証しと、新たな成熟を迎えるための期間となることを期待して祈ります。主の平安が私たちにありますように。

AI 技術の成熟と教会を考える ～30 年後を見据えて～

日本アッセンブリズ・オブ・ゴッド教団／中央聖書神学校 能城 一郎

1. はじめに技術の習得ありき

「今は、IT 技術を身に着ける時期。技術の暗黒面を模索する時ではない。」と提言したのは、第四回日本伝道会議(JCE4@沖縄 2000)の分科会(インターネットの光と影)の席上である。今では、JEA、福音主義神学会、第六回日本伝道会議(JCE6@神戸 2016)等の情報の電子化が精力的に行われ、教会が ICT 技術を巧みに利用してきている。COVID-19 の中、Zoom ですぐに臨時神学委員会を開催することが出来た。これも、各人、関係団体の ICT 技術習得の積み重ねの結果である。

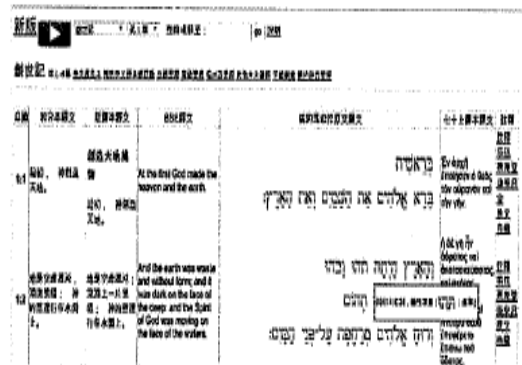
この騒動がなければ、今年 5G の導入でビッグデータをはるかに凌ぐ AI 技術に依存する社会への扉が大きく開くはずであった。扉の先を垣間見るには数年かかるかもしれない。「30 年後を見据えて」の副題は、ICT 技術界では定説である二つの特異年による。(1)IT 技術の大転換、2032 年。(2) ネット情報の飽和期、2045 年。2032 年、聖書研究ソフトは、PC の OS に依存しないネットで動く、iCloud 化に移行する。2045 年、ネットの情報が飽和する時期である(※2049 年説もある)。人類が、経験したことのない AI との共存世界に突入するのである。

「永遠に立つ神のことば」を読みつつ、流動する ICT 技術習得に爽やかに適応することが、現代の教会に求められているのは確かなことであろう。

2. 聖書を読むことの新スタイル

2018 年の春と秋、台湾で若者の聖書研究のスタイルを調査する機会があった。皆、スマホで聖書を読み、お証の時もスマホ画面を見ながら話をする。週報は、スマホでダウンロードである。圧巻だったのは、神学生が利用する聖書アプリである。無論無料である。(https://; bible.fhl.net/)

画像左上の新版をクリックするとクリエイターを武者震いさせるサイトが待ち構えている。筆者は、第七回日本伝道会議(JCE7 @東海 2023)のプロジェクト・リーダーを兼任している。2023 年のフォーラムでは、このサイトを含めネット上の「聖書研究サイト」を調査し参加者と意見交換をしたいと願っている。過去の聖書研究サイトに関しては、『「聖書信仰」の成熟をめざして』(いのちのことば社、2017 年、113-120 頁)に紹介させて頂いたのでこれをお読みして頂ければ幸いである。



3. You Version と AI 技術

この無料アプリを利用されている方はかなりおられることでしょう。口語訳、新共同訳聖書を無料で読み聖句検索もできる。さらに、アカウント登録をすると AI 技術を利用して世界中で今、どの聖句が読まれているか等の AI 技術ならではの情報の入手が可能である。2032 年までに、JEA 青年委員会、日本青年伝道会議(NSD)の提唱する「神の国マインド」の若き AI 技術者の登場を祈るばかりである。



(<https://www.christianpress.jp/the-2nd-japan-youth-mission-conference/>)

4. 仮称・日本語聖書の訳語データベースの構築

新改訳 2017 だけが利用する訳語を二つ紹介する。新約では、「神の公僕」、旧約では、「交わりのいけにえ」である。「公僕」の訳語は、ロマ書 13 章 6 節にのみ登場する。かつては、「神のしもべ」、「神に仕える者」と訳された箇所である。「交わりのいけにえ」は、85 節あり、「和解のいけにえ」が、旧訳語である。『聖書協会共同訳』では、「会食のいけにえ」と改訳されている。聖書翻訳のライフ・サイクルは 30 年といわれる。30 年後の聖書翻訳事業の備えとして、各翻訳聖書を構成する約 3 万節に含まれる「漢字文字列」を 10 分程度で抽出する AI プログラムの開発をしている。このことは、神学委員研修会ですでに報告済である。この構想は、今後、JCE7 のプロジェクト・フォーラム等で紹介する予定である。

5. 神学的特異年 2054 年（大シスマ千年）

廣瀬薫師（JEA 理事長）が、「一致・超教派・神の国」の講演の中で「大シスマ千年・2054 年」に向けての神の〈はたらき〉に対する期待を熱く語られた（『舟の右側 7 月号』、2018 年）。COVID-19 の中、神の恵みの業の停止は決してない事は明らかである。2032 年、2045 年、そして、2054 年と神〈はたらき〉が世界中でより鮮明になってゆくことを願うものである。

コロナ禍におけるみことばの励まし

イムマヌエル総合伝道団／聖宣神学院 宮崎 聖輝

コロナ禍の中、関東 4 都県では緊急事態宣言の解除が目前に迫りました。しかし今後の見通しは依然として厳しく、長期戦を覚悟しなければならない状況のようです。このような中、多くの教会が困難に直面しその対応に追われていることでしょう。私が遣わされている教会でも、この数ヶ月間、配信礼拝に切り替えて対応してまいりました。なにかと信徒方も牧師も孤立を覚えやすい時期かと思いますが、このようなときだからこそ、みことばに励まされ、捕らえていてくださっている主を見上げて前進させて頂きたいと願っています。私にできることはここ最近、講壇で開いたみことばを分かち合うことではないかと思い、以下に記します。皆様の上に主からの励ましと御支えがあることを心から願っています。

1. 創世記 28 章 16 節「まことに主はこの場所におられる」

教会堂での礼拝が難しくなり配信に切り替えた時、開かせて頂いた箇所です。有名なヤコブの逃避行の場面となります。兄の追手に怯え身の危険を覚えつつ孤独な旅を続けていたヤコブに主が臨んでくださって、ともにいてくださる主のはげましが語られました。「思いがけない時、思いがけない所に主は共にいてくださる」これがヤコブが学んだ確信です。今、わたしたちは、教会堂に集えない状況かもしれませんが、主は、思いがけないとき、思いがけない場所にも臨在して下さり、ヤコブにそうであったように、「あなたを離れない」と励ましてくださる主です。それぞれの場所が神の家、ベテルとなることを覚え、それぞれの家庭礼拝をも祝して下さる主を見上げましょう。

2. 詩篇 46 篇 10 節「やめよ、知れ。わたしこそ神」

詩篇 46 篇ほど、信仰者が困難や試練に直面したときに励まされた箇所はないのかもしれませんが。今、私達は目に見えないウイルスに囲まれ、恐れをいだかざるをえません。まだ治療法もワクチンも確立しておりません。しかし本当に恐れるお方はただ一人主であることを覚えたいと思います。みことばを通して主が「わたしこそあなたのさけどころ、また力、苦しむ時そこにある強きたすけ」「やめよ、知れ。わたしこそ神」と呼びかけています。目に見えない敵に右往左往する私達かもしれませんが、決して揺り動かされることのない主を、心を留めて今週も歩みましょう。

3. ルカの福音書 17 章 12～13 節「彼らは遠く離れたところにたち、声を張り上げて」

ここにソーシャルディスタンスを強いられたグループが登場しています。彼らはサマリヤにも入れず、ガリラヤにも入れない境で生きる者たちでした。今、共に集う教会堂から離れて礼拝を捧げています。距離を強いられています。けれども今朝、主は、その遠く離れたところの叫びをしっかりと受けとめてくださいます。そして、時間はかかるかもしれませんが、主は必ずご自身の栄光を教会に現してください。ここに出てくる者たちのように、主の御声に反応して歩みましょう。そして栄光が表されたとき、教会堂に引き返してきて、毎週、主に感謝の礼拝をささげるお互いでありたいと願います。

4. ヨハネ 4 章 19～24 節「まことの礼拝者たちが御霊と真理によって父を礼拝する時が来ます」

当時、サマリヤ人とユダヤ人の間で「礼拝場所」についての神学論争がありました。サマリヤ人が主張する礼拝場所と、ユダヤ人が主張する礼拝場所とが食い違っていたのです。主は、場所が問題ではない、御霊と真理によって父を礼拝するか否かが問われていると語られました。コロナ禍の中、インターネット上の礼拝について議論があると聞きました。答えをすぐに出すことは難しいかもしれませんが、少なくとも主は、場所がどこであっても、御霊と真理によって捧げる礼拝を父が祝して下さると語って下さいました。もちろん教会堂での礼拝を心から待ち望む私達ですが、自宅の礼拝であっても、そこで神の言葉が聞かれ、内に住みたもう御霊によって導かれて礼拝をささげるなら主は喜んで受け取って下さることを覚えましょう。初代教会は、迫害が続く中、神殿という場所を追われてもなお家の教会などを通して礼拝を死守し続けたことを思い起こします。

5. ヨハネ 20 章 19 節、26 節「戸に鍵がかけられていた…するとイエスがやって来て」

19 節と 26 節で同じ描写が繰り返されています。「戸に鍵がかけられていた…けれどもそこにも主が入ってこられた…平安があるように」。弟子たちは、ユダヤ人指導者を恐れ、週の初めの日、戸に鍵をかけていました。しかしそこに主が入ってこられ「平安があれ」と語られました。恐れを抱き鍵をかけてそれぞれの場所で主の日を守るその代わりに、主は入ってきてくださり、いつもと変わらない挨拶で「平安あれ」と励ましてくださいます。一方、孤立していたトマスは、最初、復活の主に出会うことができませんでしたが、次の週、弟子たちの交わりに加えられて主と出会いました。主は交わりの中にご自身を表されることをも覚えましょう。コロナ禍の中においても、進んで交わりの中に身を置くお互いでありたいと思います。

イムヌエル綜合伝道団「イムヌエル教報 888 号」(2020.7)

【新型コロナウイルスと教会 この事態から何を学ぶか】

一歩踏み出す勇気と努力
将来を見据えた視点を

高津教会 藤本 満

■ 神の憐れみに守られた

教会の危機意識は低かったのではないのでしょうか。ウイルス感染の危機の報道を目にするようになったのは、1 月の終わり。そして 2 月の中旬に東京の屋形船、続いて大阪のライブハウスでクラスターが発生。その頃、韓国では新興宗教施設で二千人の集団感染。

私は 2 月の第三聖日、説教を聞く立場で会衆席に座っていました。まさに教会はライブハウス。直ぐに連絡を回して、可能な限りネットで礼拝することにしました。

3 月中頃、カナダで悲しい出来事がありました。感染が拡大していく中、牧師は迷った末に計画されていた記念集会を開催。消毒やソーシャルディスタンスを守ったものの 41 名のうち 24 名が感染、2 名が死亡。「あの日に戻ってやり直したい」、牧師は涙していました。医療・介護従事者は必死の奮闘をしてくださり日本を守りました。教会にも多くおられる関係者の方々、ありがとうございました。

■ 聖霊に押し出される

数十万人の感染者を出した国と 2 万人弱の日本では状況が違います。コロナを克服するには集団免疫力をつける以外にないと言われています。ワクチン等の開発と共に状況は沈静化に向かうのかもしれませんが。今回の反省と共に、将来に向けて考えることはあります。

教会はなんでも「実際に」集まることを前提としてきました。礼拝、祈禱会、教育、会議。しかし、遠隔地にしながら集まるのが「できる」環境をインターネットはすでに実現しています。利用するかしないかは、私たち次第だったのです。積極的に乗り出してみる。一般社会で、会議や教育がオンラインでできるのに、私たちができないはずはありません。

感染症対策のための「その場しのぎ」でなく、コロナに押し出されて、いや聖霊に押し出されて新たな可能性を探る。それは、特に信徒の方々に求められています。私たち牧師は得意ではありません。IT のこともスマホ文化も SNS もよくわかりません。よく知っている皆さんが、牧師たちに教えてください。中高生の聖会だってできる! と。(とにキャンのように)

■ やがて集えない時が来る

日本の教会にとって、今回のコロナ禍の延長に 2030 年問題があります。80 代後半になれば、教会に行くことは難しいでしょう。しかし、オンラインで礼拝に参加できます。いまそれを経験しておくことで、人生最後まで礼拝から離れない自分を作り上げることができます。

牧師が引退したり、牧師が教会に常駐してなくても、他の教会と共に礼拝することができます。過疎が進む地域の教会にとって、今回のコロナは新たな活路を開く一助となったはずです。

内山勝先生が数年前にグループ教会制をお考えになりました。どこかの教会の傘下に入るのではない。共に礼拝を守る複数の教会をインターネットで実現していく——そういう意識を培うチャンスであったと思います。

■ 牧会を重んじる方法

礼拝をインターネットで中継するノウハウがあっても、魂のケアはそうはいきません。私にとっては、この課題がいつも残ります。

今回、信徒同士でオンラインで祈祷会を持っている、ご年配の方が互いに電話で励まし合っているというケースを耳にしました。きめ細かな牧会レターを毎週郵送している先生もおられました。

「距離」とは無関係に、いつもだれかと霊的な交わりがあり、互いに励まし、祈り合う群れをどのように形成していくのか。これは、日本の教会が直面している大きな課題です。私たちはそのことをよく考えるように主から示されたと思うのです。(次回はオンラインの聖餐式について書きます)

日本バプテスト教会連合「連合通信 NO.237」(2020.6.1)

コロナ禍をとらえる

日本バプテスト教会連合理事長 倉嶋 新

作家の平野啓一郎氏が「『自分さえよければ』という生き方では、最終的には社会が壊れてしまう。もう格差社会や自己責任論ではいよいよ立ち行かないと思う」と現在の状況に関して語っています。

しかしこのようなことは、これまでも繰り返し問われてきた「あり方」でもあるでしょう。疫病は新型コロナウイルスに始まったことではありません。長い人類の歴史のなかで繰り返し現れる現象の一つです。しかし、その現象に自分たちが置かれた瞬間、それはただの繰り返しされる出来事で終わらせることはできなくなります。先の見えない渦中に放り込まれてしまったように感じるからです。

このような時必ずと言っていいほど「神がおられるのになぜ」という神義論がにわかに頭をもたげます。しかしそれは、聖書から言えば見当違いな問いです。むしろ罪を犯した後の世界は、すでに今私たちの目の前にある世界と変わらず、そこには常に死や病、争いや憎しみ、悲しみや怒りが存在していたからです。だからこそ、私たちはこのようなときに、改めて聖書の確かさを見出すことになります。主イエスも言われました。「大きな地震があり、方々に飢饉や疫病が起こり」と。確かにこのウイルスは未知なものであり、恐れるに値するものです。しかし、私たちはそれ以上に恐ろしいものを知っています。それは「罪」と呼ばれるものです。さらに私たちは教えられています。最も恐れるべきお方を。良きことも、また私たちにとって悪しきことも、すべてを統べ治められている真の神そのお方です。そして私たちは今、改めて問われています。私たちにとって最も大切なことは何か。最も信頼すべき方は誰か。救いとは何か。地の塩、世の光として生きるとはどのようなことか。互いに愛するとは、互いに仕えるとは、キリストのからだとは、永遠のいのちとは何か。そして今この時に私たちが生きていくべき、神のみこころとは何かを。

この事態が長期化することは誰の目にも明らかです。すでにそれぞれの教会では、礼拝や諸集会において感染症対策を施し、細心の注意と配慮を続けてくださっていることと思います。また経済面でも厳しいところを通らされることでしょう。連合としてもキリストのからだを支えられるように寄り添い、できる限りの支援をと考えています。しかし、厳しさが増していくなかであるからこそ、私たちはそれをただの苦しみとして捉えるのではなく、そのなかにも変わらぬ神の御手とご計画があること、そして私たち教会が、いつでも主イエスにある福音と良き業に励むことへと押し出されていることを、信仰をもって告白したいと思うのです。「人はみな、火によって塩気をつけられます。塩は良いものです。しかし、塩に塩気がなくなったら、あなたかたは何によってそれに味をつけるのでしょうか。あなたがたは自分自身のうちに塩気を保ち、互いに平和に過ごさない」(マルコ9章49、50節)。

私たちは何も持っていないかもしれませんが。しかし、私たちには主イエスのいのちが、また福音が確かに与えられています。新型コロナウイルスが真の苦難なのではありません。そこで起こる、恐れ、不安、憎しみこそが、私たちにとっての大きな試練なのです。主にある知恵を尽くすことはもちろんのこと、私たちは主イエスにある互いへの愛と感謝とに支配されてまいりましょう。そしてごいっしょに主イエスの御跡に従ってまいりましょう。

「それからイエスは、すべての町や村を巡って、会堂で教え、御国の福音を
宣べ伝え、あらゆる病気、あらゆるわずらいを癒やされた」(マタイ4章23節)。



JEA 宣教フォーラム 2020

コロナ禍で、宣教について考える

日時：2020/9/29(火)～30(水)

会場：オンライン (zoom meeting)

主催：JEA 宣教委員会

お申し込みは、<https://jeanet.org/forum/> (JEA サイトからでも申し込みます)

参加費：3,000 円 (資料代 1,000 円を含む) 申し込み締め切りは 9/19(土)



9/29(火) 午前 分科会 1 (Zoom) 10:00～12:00

- <1> 宣教研究部門 A 「次世代を育てる宣教インフラ整備 (次世代育成)」調査報告
- <2> 異文化宣教ネットワーク A 「世界の日本語宣教と日本の教会の繋がり」
- <3> 神学委員会 A 「我、教会を信ず」・「オンライン礼拝とは」
- <4> 「新型コロナウイルスと教会の社会的責任」 (吉田浩二師 JECA 厚別福音キリスト教会牧師、元公衆衛生医)

9/29(火) 午後 分科会 2 (Zoom) 14:00～16:00

- <1> 宣教研究部門 B : 宣教担当審会議 「コロナウイルス感染拡大下での各教団・宣教団体の対応」
- <2> 異文化宣教ネットワーク B 「日本における外国語宣教と日本の教会の繋がり」
- <3> 神学委員会 B 「旧約聖書における律法の柔軟な運用」・「いっしょに集まる幸い」
- <4> 「日本伝道会議の歴史」

9/30(水) 午前 主題講演 (Zoom ウェビナー) 9:30～12:30

開会のあいさつ (石田敏則師 シオン・キリスト教団蒲田教会主任牧師、JEA 理事長)

▶主題講演 1 「コロナウイルス禍での教会～宣教の課題と可能性～」

- 講演 (中西雅裕師 日本ホーリネス教団横浜教会牧師、JCE7 プログラム局長)
- レスポンス (三浦春壽師 JECA キリスト教朝顔教会主任牧師、JEA 宣教委員会担当理事)
(岩上敬人師 JEA 総主事、東京基督教大学・東京聖書学院講師)
(吉川直美師 シオンの群教会主任牧師、聖契神学校教師)

▶主題講演 2 「JCE7 に期待されるもの」

- 講演 (小平牧生師 キリスト兄弟団西宮教会牧師、JCE7 実行委員長)
- レスポンス (羽鳥頼和師 JECA 自由ヶ丘キリスト教会牧師、JCE7 開催地委員長)
(畑中洋人師 日本同盟基督教団石神井福音教会牧師、JCE6 事務局長)
(大嶋重徳師 鳩ヶ谷福音自由教会牧師、前 KGK 総主事)

9/30(水) 午後 分科会 3 (プロジェクト別 Zoom) 14:00～16:00

- <1> 聖書信仰の成熟を求めて
- <2> 日本社会と宣教：「コロナ禍で問われ、覚えておきたい教会のテーマいくつかのち、空気、社会的責任、身体性、十字架、悔い改め…」
- <3> 教会と「国家」：「コロナ禍と信教の自由」
- <4> 持続可能な社会の構築：「持続可能な開発目標 (SDGs) と宣教協力」
- <5> 災害対応を通して仕える教会：「コロナ禍における被災地支援」
- <6> ファミリーミニストリー：「コロナ禍で見えてくる家族の本質」
- <7> ディアスポラ宣教協力：「コロナ禍と故郷を離れて暮らす人々への愛」
- <8> ビジネス宣教協力の次世代構想：「複合災害からの新常态に向けたビジネス宣教協力」
- <9> 教会開拓、教会増殖：「コロナウイルス対策セミナー (アジアアクセスジャパン主催) のデータからの考察」
- <10> 痛みを担い合う教会：「東日本大震災からコロナ時代へ～骨太の福音に生きる教会を目指して」
- <11> 青年宣教：「SNS を駆使する世代とポストコロナの青年宣教」
- <12> 子ども：「子どもプロジェクトの現在の活動報告と JCE7 に向けての活動について」
- <13> 宣教協力とそのインフラ造り

あとがき

2019年12月、中国の湖北省武漢市において発生したとされる「新型コロナウイルス」の感染が、世界的に拡大し、2020年8月末時点で感染者数は、2,510万人（日本は6.8万人）、死亡者数は84万人（日本は1.2千人）を超え、止むことなく拡大し続けています。その影響で日本でも、外出自粛や休業が全国的に広がり、レジャーや外食をはじめ幅広い分野で支出が抑えられた結果、GDPが戦後最悪の下落を記録し、倒産や失業者の増大など、「コロナ不況」の様相を呈しています。

それに加えて、連日40度を超すような猛暑で熱中症警戒アラートが出されたり、日本各地の豪雨災害による被害等も含め、「複合災害」が「新常态（New Normal）」化しています。そして、先が見えない不安や恐れの中で、新たな生活様式が求められ、それに伴って今までの意識や価値観、コミュニケーションの取り方も変更が余儀なくされ、分断化の時代、見える形が崩れ、見え難くなる時代、オンラインとオフラインが融合する時代等、時代はまさに「曲がり角」を迎えていると言えるのではないかと思います。

そのような時代の変化に対し、キリスト教会においても、今後どのような社会の実現を目指す必要があるのか、また、日本の文化的、宗教的な壁を乗り越えて、各教会がいかにして地域の多くの人と繋がっていくにはどうしたらよいのか等、キリスト教会全体の問題として、真剣に考えていく必要があるように思います。

そのためには、今まで以上に、教団や教会同士が繋がりを深め、連携を強化していく必要があると思いますし、また、それらを実現する手段として、現在一般企業を中心に活発化しているDX化（デジタルトランスフォーメーション）の導入等も、積極的に図っていく必要があるのではないのでしょうか。

以上のような状況に鑑み、今回号も前回号に引き続き「新型コロナウイルス対応特集」として発行することといたしました。「巻頭言」は、JEA宣教委員会宣教フォーラム部門の責任者であり、2023年名古屋にて開催予定の「第7回日本伝道会議」実行委員長でもある小平牧生先生にお願いをして寄稿していただきました。現在、宣教フォーラム部門を中心として、9月29～30日に開催される「宣教フォーラム2020」の準備が進められています（P.34のチラシ参照）。そこでは、「コロナウイルス禍は、教会、宣教、礼拝など、私たちの本質を考えさせる機会である。この経験を踏まえ、JCE7につなげていきたい」として、「コロナ禍で、宣教を考える」をテーマに掲げ、主題講演や分科会のテーマを見ても、ほとんどが「コロナ禍」に関連した内容になっています。

従って、一人でも多くの主に在る方々が、「コロナ禍における教会、宣教、礼拝」について、ご一緒に考えていただくには、よい機会になるのではないかと期待しています。

そのため今回号は、少々ボリュームが多くなりましたが、「新常态（New Normal）」におけるキリスト教会の本質的な在り方について考える上で参考になるとと思われるものとして、他山の石とすべき仏教寺院の状況や対応を示すアンケートやキリスト教会における影響や対応のデータ、或いは一般有識者の評論や教皇庁生命アカデミーを始めとして、日本基督教団関係の神学者及びJEA神学委員会のメンバーの方々の声や考察等、幅広く関係する資料を集めて掲載いたしました。ご参考にしていただければ幸いです。

（初穂）

献金者名（2020年4月～2020年8月）

◎尊いご支援に、心から感謝申し上げます。（敬称略）

金安信、崎山清、柴田美枝子、島田治夫、花園文子、廣田具之、松原正幸、柳下弘、
中野覚、清瀬グレースチャペル、センド国際宣教団、日本同盟基督教団、
本郷台キリスト教会



感謝のご報告と継続支援のお願い

日本宣教リサーチ(JMR)は、今年の4月で発足から6年目を迎えます。旧教会インフォメーションサービス(CIS)の支援者の継続的なご支援や、新たな支援者の方々のご支援をいただき活動が支えられて来ましたことを心より感謝いたします。

2020年度も、JEA(日本福音同盟)宣教委員会宣教研究部門の一員として、日本宣教の課題である「次世代育成を育てる宣教インフラの整備」「地域宣教ネットワークの構築による地域宣教の強化」「教会の再生と増殖の道筋の明確化」に取り組むとともに、TCU国際宣教センター「キリスト教葬制文化研究会」の一員として、全ての人に開かれた「キリスト教葬制文化の確立」に取り組んでいきます。

どうか引き続きJMRの働きにご期待くださり、更なるご支援を賜りますよう、よろしくお願いたします。

JMRの活動は、東京基督教大学に寄付される指定献金によって賄われます。会員には一般賛助会員と特別賛助会員があります。各会員の要件と提供される成果物は以下の通りです。

(1) **特別賛助会員**:趣旨に賛同し、支援して下さる教団・教派、宣教団体等

- ・一口 30,000 円(何口でも)
- ・シンポジウムや研究会・研修会等の開催のご案内
- ・毎年 2~4 回「日本宣教ニュース」のご提供
- ・毎年 1 回「JMR 調査レポート」のご提供

(2) **一般賛助会員**:日本宣教に重荷と関心を有する個人、教会等

- ・一口 2,000 円(何口でも)
- ・シンポジウムや研究会・研修会等の開催のご案内
- ・毎年 2~4 回「日本宣教ニュース」のご提供
- ・毎年 1 回「JMR 調査レポート」のご提供

日本宣教リサーチへの支援金は、税制優遇措置が受けられます

東京基督教大学への寄付金(献金)は、税額控除制度の認定を受けているため、税制上の優遇で還付金が最大で寄付金(献金)額の約 50%となります。

詳しくは、☎0476-46-1131(TCI 募金係)までお尋ねください

郵便振替口座:00110-5-575648 学校法人 東京キリスト教学園明日の宣教者育成募金

* お振込みの際には、振替用紙に「**日本宣教リサーチ 指定**」と必ずご記入ください。

(振替用紙がお手元がない場合はこちらよりお送りいたします)



東京基督教大学 国際宣教センター

日本宣教リサーチ

【Japan Missions Research】

〒270-1347 千葉県印西市内野三丁目 301-5
学校法人 東京キリスト教学園 東京基督教大学 国際宣教センター内
TEL:0476-31-5522 FAX:0476-31-5521 E-mail:jmr@tci.ac.jp
<http://www.tci.ac.jp/institution/fcc/jmr>

日本宣教リサーチ代表 山口 陽一(東京基督教大学学長)

日本宣教リサーチ研究員 柴田 初男